

---

# 続 リルガミン戦記 群雄編

槇原勇一郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

続 リルガミン戦記 群雄編

### 【Nコード】

N83860

### 【作者名】

槇原勇一郎

### 【あらすじ】

上帝トレボーによってリルガミンに統合されていた五ヶ国、ラストティア、ガーランド、コーウエル、バンセンノルム、マッケンゼンで独立の気風が高まった。トレボーが失踪し、ニルダの杖の効力が失われたとき、リルガミンが危機に陥っただけでなく、既知世界全体が戦乱に見舞われる。

ラストティア侯爵ケイン・ノーザンライトは、隠された素性を明かし、かつて共に迷宮に挑んだ仲間たちと共に、ついに反リルガミンの軍勢を起こす。

主将アルフ・ヴァール・シャルンホルストを失ったマツケンゼン軍では、ガーランド、コーウエルの反リルガミン運動を支援することを決定。一方、西方連合を形成する盟友バンセンノルムとの間には不穏な空気が立ち込める。

この物語は1992年から1993年までに八巻発行された、『小説ウィザードリィ』（双葉社）の続編として、勝手ながら書かせて頂いたものです。7巻以降から始まった、リルガミン攻防戦（二十年戦争）のエピソードを語る「リルガミン戦記」の続きとなります。

## プロローグ

ウィルダ歴一 三二年の秋が訪れようとしている。スロウ・アンド・エフリス農園もあと一月程で収穫期を迎える。今年は何年にも見ないほどの豊作となりそうだった。

スロウ・アンド・エフリス農園の収穫祭は、単なる大農園主催の祭りではない。ラスティア州一の規模を誇るこの農園の主は、単に大農園の持ち主で顔役というだけではない。リルガミンから正式に認められた、地方侯爵、ラスティア侯爵ケイン・ノーザンライトが経営する農園なのだ。

この農園の収穫祭はラスティア地方では最大の祭りであり、農園の関係者だけでなく、周辺から多くの人々が参加する。ラスティア侯爵と言っても、ケイン自身は農園では侯爵と呼ばれることを嫌い、農園を立ち上げる時からの通称であるスロウを名乗り、身分別け隔てなく人々と接する気さくな人物であった。祭りはいつも彼自身が取り仕切り、みんなを驚かせる仕掛けを考えるのに毎年余念が無い。

その収穫祭を一月前に控えたこの時期、いつもならケインは嬉々としてその準備に勤しんでいるはずであった。実際の収穫の作業が始まるまでは、なにか問題でも置かない限り暇である。いつもどおり、夕方の見回りに共同経営者であるエフリス 元リルガミン一の商人ボルダック 共に出ていた。

「今年も安心して祭りの準備ができそうだな。今年は何をやらかすつもりだ？」

エフリスはにこやかに話しかけた。ケインの様子が例年と違うことには気づいていた。

「安心なんて出来るのかい？」

「スロウ・・・」

「三十年前、トレポーの電撃戦の時も豊作だったらしい。むしろ豊作の年だったから短期間での進軍が可能だったんだ・・・」

「お前さんはラスティア侯爵。反乱の準備もしていないのに、リルガミン軍が攻めこんでくるほど嫌われているのか？」

「バルコスキー伯爵あたりにはね。それにリルガミン軍とは限らない。反乱を起こした他の軍がここに攻めて来ないという保証はない。彼らからしてみれば、俺はリルガミン側の人間に見えることもある」

エフリスは大きなため息をついた。最近のケインはいつもこの調子であった。常に前向きで明るい気さくな人物であったはずだが、昨年の事件から人が違ったように見える。リルガミン宮廷に対する不信感が、彼の心に暗い影を落としているのだ。

ケイン・ノーザンライト。この名はリルガミン全土において、知らぬものはいないと言っている。間違いない、最も有名なラスティア人である。ラスティアの大部分を治める封建領主として、二度にわたり城塞都市リルガミンの危機を救った英雄として、そして、上帝トレポー　　ラスティアをはじめ、ガーランド、コーウエル、バンセンノルム、マッケンゼンの五ヶ国を制圧したリルガミンのマッド・オーバー・ロード　　の失踪に関わる人物として、そのエピソードには枚挙にいとまがなく、同時代にあってもすでに伝説の人物であった。

そんな彼を変えてしまったのは、リルガミンの貴族僧ガゼの死であった。ケインがラスティア侯爵の地位を得たのは、七年前、トレポーの失踪に伴い、南方のカル・オ・カリオンが進行してきた際に封印されたニルダの杖を取り戻し、撃退した功績による。実際にそのように差配したのが、リルガミンの貴族僧ガゼ伯爵であった。

宮廷の貴族たちと交わろうとしないケインが、曲がりなりにモラスティア侯爵の地位を維持出来ていたのは、ガゼの力があっての話であった。何より、元々トレポーに対する反感から、リルガミン王家に対しても忠誠心などないケインがリルガミンのために働いていたのは、ガゼの存在と、リルガミン街そのものに対する愛着があったることであった。

ガゼの死は、その二つをケインから失わせた。西方二カ国が独立

を果たし、他の属州でも独立の動きが出てくる中、長年の計画であった挙兵を行うタイミングかも知れない。

エフリスはそれならそうで構わないと思っている。農園は大きくなり、ラスティアを豊かにした。ケインがラスティア侯爵となったお陰で、ラスティアの大部分の徴税の差配は、ノーザンライト侯爵家、つまりはスロウ・アンド・エフリス農園に任されており、エフリスのやりくりで、農民の生活を圧迫せずに宮廷に対する税を収めることが出来ている。エフリスはリルガミンの出身だが、今のリルガミンには未練はなかった。戦乱となればどのみちラスティアだけが平穏で入れるはずはない。それはケインの言うとおりなのだ。

ならば、自分たちが面倒を見てきたラスティアの若者たちや、領内の民衆のためにも、ケインが挙兵し、リルガミン軍と戦うべきなのだ。エフリスのイライラは、ケインが似合わないことに、いつまでも結論を出せていないことにあつた。

思い悩むなどケインには向かないことなのだ。いつも行動が思考に先立ち、それで結果を出してきた男なのに、この数力月はすっかり煮え切らない雰囲気を漂わせている。

「そろそろ二ト口あたりが遊びに来るんじゃないのか？」

エフリスは話題を変えた。いざ、祭りの時期になれば、ケインの憂鬱も晴れてくるかもしれない。あるいは、そんなことも行つてられないような状況に巻き込まれる可能性もあるが、それならそれでいいのである。エフリスは達観したもので、ケインのような男が鬱々と日々を過ごすくらいなら、戦乱でもあつて、余計なことも考えられない状態になる方がよっぽどマシだと思っているのだ。

「祭りの頃は人が多いから・・・二ト口は来ないだろ。今年はむしろアレキサンダーを招待してやりたいな。本ばかり読んでというのも気になっていたが、シルヴィを師匠に魔法の修行なんてしたら

・・・」

「方向音痴まで写らなければいいって？」

「方向音痴はともかく、俺は食事代も削って魔法書を買いあさっていた若い頃を思い出したよ」

「ああ・・・ずいぶん前の話だな・・・」

ケインとエルフの魔法使いシルヴィ・プリスが知り合ったのは、まだトレポーが健在で、反逆者ワードナが『狂王の試練場』を作り上げて、冒険者が地下迷宮に挑み続けていた時期である。当時のシルヴィははぐれエルフの冒険者でしかなく、ダンジョンで得られる僅かな収入と、古書店でのバイトでどうにか食いつないでいた。高価な魔法書を買うためには、食費を削らざるを得なかったのである。

『金がない。食べていない』と言いながら、いつも新しいエルフ語の魔法書と呼んでいる彼女にトレポーの密偵ではないかとの疑いも掛けたこともあったが、実態は、食費すら残さない無計画さで魔法の勉強に没頭していただけであった。

アレキサンダーはケインとともにニルダの杖奪還のパーティーの戦友であったバイトレットとヘイストスの息子である。奇妙なことに一流の戦士である二人の間に生まれた息子はまれに見る秀才であった。本の虫という意味では元々シルヴィと共通点があったのかもしれない。ガゼの死以降、アレキサンダーは魔法の修行に取り組み始めた。今はシルヴィのが内弟子としてあずかっている。まだ子供のアレキサンダーを他人に預けることには当然抵抗はあっただろうが、母バイオレットにとってはシルヴィは親友であり、本人の意志を認めたのである。

二人は日課の見回りを終えて、母屋に帰った。すでに夕食の時間である。侯爵になっても、ケインの生活習慣には何ら変化をもたらさなかった。農園の使用人たちと共に取る夕食も一緒である。いつもどおりの短い祈りの言葉を言い終えてから、ライラの料理を食べ始める。この農園の最大の実力者はこのでっぷりとし太ったライラだという者もいる。ケインやエフリスでさえ、ライラの説教には頭を垂れて素直に聞くしかない。と言っても、師に向けた顔では、こ

っそり舌を出していたりするのだが。

「そういえば・・・スロウ、リルガミンから手紙が来ていました」  
そう言っつて、封筒に入ったものを渡してきたのは、ケインの養女であるメリーである。今一人、タイムと共に『ラスティあの二鏡』  
と言われる美しい娘であった。

「そうか・・・ありがとう」

「届けて暮れた方は長老の使いだと仰つてました」

「ふむ。食後にゆっくり読むことにするよ」

スロウ当てに手紙が来るとしたら、差出人には二種類が考えられた。一つはリルガミンの長老ホワイトストーンやニルダ寺院の関係者からで、こちらはリルガミンの様子を伝えてくれたり、単に近況を報告してくれるだけのものである。もう一つはケインの嫌いな手紙であった。宮廷からの呼び出しである。以前はガゼを通してしかそつした話は来なかつたのだが彼亡き今は直接リルガミン王の周辺の者から連絡が来たりする。うつとおしいことこの上ないのだが、今回は違いそうだ。

「さて、手紙は酒の肴だな・・・」

「ああ、俺は読んでからにするよ」

「そうか、わしは先にやらせてもらうよ」

エフリスは強い酒をグラスに注いだ。ケインの分は注がず、グラスだけをテーブルの上に置いてやった。走行しているうちにケインは手紙の封を切り、手紙に目を通して見る。

「で、なんて書いてあるんだ？」

「・・・」

「おいおい、話せないような内容なのか？」

「変な手紙だ・・・」

「変？まさか迷路を攻略しろつて話じゃないだろうな？」

エフリスは冗談を言った。ケインは狂王の試練場、ニルダ寺院、

それ以外にも北の洞窟などの様々な迷宮を攻略した実績を持つ。おそらくは既知世界最高の冒険者であろう。だが、今はラスティア侯爵の地位を帯びた身である。余程切羽詰った話でなければ、ケインにそんなことを依頼してくるはずもない。

「何の用かも分からないが、とりあえず、リルガミンに来いということだ」

「なんだそれは・・・まるでニルダ寺院の時みたいじゃないか・・・」

「ああ、だが宛名は『スロウ殿』でも『スロウ殿とエフリス殿』ではなく、『ラスティア侯爵殿』とある・・・長老が爵位で俺を呼ぶなんてかなり珍しいな・・・」

リルガミンの長老、ホワイトストーンはケインのことをよく知っている人物である。だから、ケイン好まない爵位での呼び方は公式の場でない限りほとんどしない。

「どういう事だ？」

「わからん。筆跡は確かに長老の者だ・・・」

手紙はごく簡単なもので、次のようにあった。

『リルガミンに関する相談事あり。至急参られたし。長老』

文面はニルダ寺院の時と全く同じ。ただし、あの頃は長老にも自分たちの正体は明してなかった。『スロウ殿』という宛名であった。『で、お前さんの勘はどう言っている？』

スロウの勘の良さにはエフリスはなんども助けられている。この男の独特の危機感知能力は理屈で説明できなくとも十分な実績を伴っている。

「まあ、宛名が爵位になっているのは、公式の意味合いのある招待だからかもしれん」

「だが、それにしても文章が簡単すぎやしないか？」

「確かにそうだが、それについては良く解らん」

「・・・・・・・・」

ここ最近の鬱々とした日々がケインの鋭い関する奪ってしまつて

いる可能性を考えたが、それはどうしようもないことだった。

「明日朝一出ですよ」

「わしもか？」

「いや、今回は侯爵として呼ばれているのだから、私一人で行くよ」

「ふんっ！随員もなしに王城に向かう侯爵様なんて、おまえさんだけだろっがな」

「今日は酒は辞めておくよ」

そう言っつて、ケインは自分のグラスには酒を注がずにそのまま棚にしまい、寝室に引き取っつていった。

「ふんっ……気に食わないが……何も無いよりはましか……」  
エフリスの独り言には複雑な響きがあった。

## シャルンホルスト死す

ヴェストフアーレンは身動きができなかった。目の前の風景を信じられなかった。目の前に転がっているのは二つの死体だった。一つはおそらく火災呪文と思われる炎によって顔面が黒焦げになっていた。人肉や髪の毛のコゲる異臭がたちこめている。もう一つの死体には短剣が胸に突き立っていた。

すぐに分かった。黒焦げの死体はエンジコート将軍。つい先日まで、リルガミン軍を率いていた男だった。つい先日まで、このアイゼル城を部隊にした壮絶な攻防戦の寄せての司令官である。

そして、もう一人は・・・

『アルフ・ヴァール・シャルンホルスト死す』

この報は瞬く間にマッケンゼンのみならず、リルガミン本土をはじめ、既知世界の隅々までに及んだ。トレボー電撃戦以降、始めてリルガミン軍に対する勝利を収めた若き英雄は、暗殺に現れた敵将との相打ちという壮絶な最後を遂げた。

だが、あまりにもドラマチックなこの最後は、むしろマッケンゼン軍の士気を著しく高めた。アルフが創り上げた組織は、アルフ個人の指示だけで動くような機械のような組織ではない。末端にいたるまでの一人一人が考え戦う組織、頭だけでなく手足が考える軍、それがマッケンゼン軍であった。

シャルンホルスト邸。マッケンゼン軍の司令部であるこの建物は、以前はリルガミン軍の司令部であった。さらにその前はアルフの母

の実家、シャルンホルスト家の邸宅であった。その日の打ち合わせが行われた部屋は、アルフ自身がなんども幕僚たちを集め、打ち合わせを行った場所である。だが、議長であるアルフが座るべき席は空席であった。

「アルフ様の死の報は一次は全軍に動揺を与えましたが、すぐに収束しました。アルフ様の思想が全軍に行き渡っていたが故でしょう。・すでにリルガミン本土にも伝わっているかとは思われますが、だからと言ってすぐに制圧軍を派遣する様子はありません。向こうさんもエンジコート將軍を失ったばかり。兵力はかき集めることは出来なくもないでしょうが、司令官を引き受ける将帥がいないのでしょう。中央の貴族たちが軍属に対して不快感をいっているのが原因のようです」

その報告は情報收拾に責任を持つヴォルトの口から語られた。顔には疲れが出ている。

「バンセンノルムの様子ですが、マッケンゼン軍以上に混乱しています」

ヴォルトに続いて報告を始めたのは、魔術師のルイドシュタイナーだった。アインゼル城の攻防戦では友軍バンセンノルム軍との連絡役を担って、リルガミン軍に対する最後のダメ押しに大きな役割を果たした。アルフの死の報があつて程なく、転移魔法マロールを使ってバンセンノルム軍に侵入し状況を確認してきたのである。

「アルフ様によれば、今回の戦いが終われば、バンセンノルムとの同盟関係の重要性は一時的に低下するということでした。むしろ、西方連合としてまとまるよりも、それぞれ独立した勢力として別々に動いている方がリルガミンにとっては厄介なはずだと。これは、コーウエル、ガーランド、ラストティアについてもそうです」

アルフと最後に話した(・・・・)クラヴィーアがその言葉を報告する。

「コーウエルにはルイドシュタイナー、ガーランドにはムロージックに向かつてもらうのが良いの。それぞれの祖国の独立に尽力する

ことじゃ。マツケンゼン同様、出来れば独立の象徴になれる人物を探るのが良かるう。王家か・・・王家に近い貴族、もしくは電撃戦で最後まで抗った英雄・・・その末裔を探すがいい」

グロツサー・クルフェルトは兵器技師であるが、アルフにとって強力なブレインであった。そもそもアルフに戦略や戦術を教えたのはクルフェルトである。あつという間に弟子に上を行かれたわけだが、アルフがいなくなった今、その存在感は以前より大きなものとなっていた。

「ルイドシユタイナー、ムロージツク、それぞれに独立した勢力を作って欲しいが、これは、マツケンゼンのためではない。それぞれの祖国のために独立運動を起こしてくれ。マツケンゼンにできることがあれば、協力は惜しまない」

ヴェストファーレンの言葉だった。クラヴィーア、ヴォルト、ヘルゴランド、クルフェルトらが深く頷く。彼らマツケンゼンの最高幹部達はアルフがいなくなっても、その後継者を争うようなことはしなかった。ヴォルトはアルフに変わる全軍の象徴となれる人物、王家やシャルンホルスト家の血筋の者を探しているが、実質的な指導者は彼らである。誰も言い出さなくても、合議制で当面マツケンゼン軍を運営していくことが決まっていた。

「問題は・・・ラスティアかの・・・？」

ヘルゴランドは独り言のように呟いた。

「それも、アルフ様は・・・ノーザンライト侯が必ず動く」と

「じゃが、ノーザンライト侯はリルガミンから侯爵に叙任された人物だ。独立を宣言するにしろ、ラスティア侯爵の肩書きでは旗頭にはなれんじやろう？」

「ラスティアはガーランド以上に激戦じゃった。王家や有力貴族は片っ端から皆殺しにされておる・・・」

「それでも・・・アルフ様は必ず動くとおっしゃってました」

ヘルゴランドとクルフェルト、最年長の二人の意見にクラヴィーアは納得できなかった。

「ふむ、まあ、アルフがそう言っていたのであれば・・・むしろにはわからなくても何かあるじやろう・・・」  
クルフェルトの言葉にヘルゴランドも頷いた。考えたところからわからないのだから、今はアルフの言葉を信じるだけいい。

マッケンゼンの幹部たちの中でも、事件の真相を知る者はごく一部であった。

バンセンノルム　マッケンゼンと共に西方連合を形成し、エンジコート将軍のリルガミン軍を打ち破った盟邦である。マッケンゼンとの違いは、同じようにリルガミンからの独立を果たしながら、メイヤー将軍の軍を打ち破ったマッケンゼン軍であり、自分たちの力で成し遂げたわけではないということである。実際にはエンジコート将軍の軍を破るのには、バンセンノルム軍の協力なしには不可能であったため、決して何もせずに独立を勝ち取ったわけではないが、ややマッケンゼン軍に付属する形にならざるを得なかった点は否めない。

バンセンノルムはマッケンゼンと同様、トレボーの電撃戦の最終段階で併合された国であり、本格的な戦闘に突入する前にリルガミンに降っていた。そのため、王族や有力貴族が皆殺しにされたガーランド、ラスティあ、コーウエルなどは違う。バンセンノルム軍の中枢を掌握しているのは二名の軍属と一名の有力貴族であった。

軍属の二人、キルヒヤー卿とザイドリッツ卿はマッケンゼン軍に協力するため、シャルンホルスト邸に赴いたこともある。今一人、ヨハネス・ウエーバーは旧バンセンノルム王国において公爵位を得ていた有力貴族の末裔であった。その背景からして、二人の軍属の上に立つ存在ではあったが、実践力を把握しているのは軍属の二名の方である。ヨハネス自身も若くして反乱組織の長として、メイヤー将軍の軍勢を相手に抵抗運動を繰り広げてはいたのだが、そのメ

イヤーを倒したのはマッケンゼン軍であり、その機会に乗じて、居残りの軍と戦い、首都を制圧したのはキルヒヤーとザイドリッツであった。ヨハネスは単にその家柄から、独立の省庁として二人に担当されたに過ぎなかった。

「で、シャルンホルスト卿の死の報告には間違いのないのだな？」

一見、高圧的な態度で詰問しているように見えるのは、彼が虚勢を張っているからである。キルヒヤーとザイドリッツの恐縮した態度も演技に過ぎなかった。

「間違いありません。すでにマッケンゼン全軍に対して十日間の喪に服せよとの通達まで出ております」

「では、マッケンゼン軍は中心を失って崩壊していくのか？」

「それはありますまい。マッケンゼン軍の組織は一人の指導者に頼った単純なものではありません。個別の指揮官、いや、一人一人の兵士にいたるまで、自分に与えられた権限に応じて判断し、行動する組織になっております。総司令官がおらずとも組織を維持することには不都合無く、また、第一人者を失ってもその後継をめぐって内部対立するような様子はありませぬ・・・合議制で当面は方針を決めていく体制のようです」

ザイドリッツがうやうやしい態度で返答する。これも演技である。報告する必要もないことだとザイドリッツは考えていた。形式を取り繕うための儀式でしかない。

ザイドリッツはバンセンノルムの軍属でありながら、アルフの思想に感銘を受けていた。身分別け隔てなく能力よって人事を行ったマッケンゼン軍の強さを目の当たりにしたからである。同僚のキルヒヤーと共に、アルフの思想を受け入れた軍隊を創り上げようと考えているが、その最大の障害が自分たちが担ぎ上げたウエーバ公であった。

「では、バンセンノルムとしては、あくまでマッケンゼンとの友邦関係維持の方が良いということか？」

「はい。ただ、リルガミンは当面西方まで遠征軍を出す余裕はない

でしょう。本土近くのガーランド、コーウェルでも反乱の動きがございます。マッケンゼンとの友邦関係を維持しつつ、我々も独自に力をつけて、自力で戦える体制を作るべきでしょう」

リルガミンからの独立はすでに成っていると云っていい。だが、今の状態では常にマッケンゼンの風下に立つことになる。マッケンゼンに対して方を並べる以上の立場を得るためには、マッケンゼン以上の力を付ける必要があった。

「マッケンゼン軍では、リルガミン軍との戦闘で功績のあった、コーウェル人とガーランド人の魔術師をそれぞれ故国に向かわせ、反乱軍を組織させようとしております。これがなれば、西方二国は当面リルガミン軍に備える必要はありません。今は戦争よりも、外交と経済政策に注力すべきと存じます」

これはキルヒャーの言葉である。キルヒャーもザイドリッツも元々軍属で政治には詳しくない。この点はウエーバの手腕を発揮できる分野であった。彼の郎党の中には、電撃戦以前に若くして文官として政治に参画していた者も多かった。そうした文官たちを率いて内政に勤しむのが今のヨハネスの役割であった。

「わかつておる・・・」

「私とザイドリッツ卿は急ぎバンセンノルム軍の軍政を整え、マッケンゼン軍以上の強固な軍隊を創り上げる必要がございます。内政面を何卒よろしくお願いいたします」

傍から見てもこれは茶番としか言いようのない打ち合わせであった。

マッケンゼンとバンセンノルムの盟邦関係以上に、バンセンノルム軍内部の協力関係の方がより不安定なものとなっていた。ザイドリッツとキルヒャーは決して無能な人物ではないのであるが、上位に頂いた人物に気を使うことができてなかった。その点、旗頭が死んでも合議制で体制を維持し続けたマッケンゼンとは対照的で、バ

ンセンノルムの内部には相互の信頼関係というのがほとんど築けて  
いなかったのである。

## ニトロ・キッド

「これで勝負だっ！」

「ちっ・・・またか・・・さすがだねえ。ニトロ・キッド卿は」

リルガミンの騎士の一人、盗賊ニトロ・キッドの生活は相変わらず自由気ままなものだった。リルガミンの騎士に叙任されて以降はこの王都もそれほど居心地の悪い場所ではない。また、すぐにどこかへ旅立つことにはなるのだろうが、今は久々にギルガメッシュの酒場でカード賭博に興じていた。イカサマなどはする必要もない。海千山千の冒険者達で満杯だった試練場時代ならともかく、今のこの店の客層は善良な連中ばかりで、賭博のやり口も大人しいものばかりであった。イカサマなど使わなくても十分勝てるし、あまり派手にかっぱぐれのも気がひけるのだ。

「おいっ！ニトロっ！そろそろ賭博は終りにしてくれんか？取締がくると厄介だ」

「ちっ・・・戦争が始まる前からどうでもいいところで気張ってやるな・・・」

「そういう事だ・・・お前さんもそのうち放浪どころじゃなくなるかもしれないぞ？戦乱が長引いたら、旅も危険になるだろ？」

「俺は盗賊ニトロ・キッドだぜ・・・戦争ごときに巻き込まれるようなへまはしねえよ」

「だといいがな・・・そうだ・・・久々に一曲頼むよ。お代は店の奢りにするから、みんなに聴かせてやってくれ」

ギルガメッシュの言葉にニトロはカードをテーブルに置き、愛用のリュートを抱え込んだ。曲目はニトロの最も得意とする冒険の物語。ニルダの杖をダイヤモンドの騎士と仲間たちが奪還するまでの叙事詩である。店の常連たちはみなニトロ・キッドが何者かを知っている。リルガミンの騎士たちは名誉ある称号を受け取ったあとでも、その生活は全く変えていない。侯爵となったケインですら、リ

ルガミンに来るたびにこのギルガメツシユの酒場で飲み騒ぐ。二ト口の歌に耳を傾け、この英雄たちと酒を酌み交わすことを誇りに思うような連中ばかりであった。

曲が終わると、店全体から惜しみない賞賛と拍手を彼に送られる。試練時代とは客層は変わったが、二ト口にとって最も居心地のいい店であることには変わりなかった。

ギルガメツシユの求めに応じて、数曲披露してから、二ト口は店を出た。

『こうしてこの街で羽根を伸ばせるのも、いつまでできることか・  
』

二ト口はそう予感している。まだ、本格的な戦争があつたのは、コーウエルとマツケンゼンだけであるが、そのうち、ルルガミン本土に隣接するガーランドやラスティアでも反乱は必ず起こる。この城塞都市もいずれは戦禍に巻き込まれることだろう。

ルルガミンという地名には二つの意味がある。一つは城塞都市としてのルルガミン。堅牢な壁に守られた、人口約二万の大都市としての名。そしてもう一つはルルガミン王の統治する領土のすべて。

魔道の中心地として古くから栄えたこの国は、元は王家と十二諸侯が支配するささやかな領土が全てであった。それを変えたのが三十年程前に現れた軍事と政治の天才、上帝トレボーその人である。トレボーがルルガミン国内の実質的な権力を一手に握ってからは、ルルガミンの国勢は衰えることを知らなかった。

トレボーの強引な外交戦と電撃戦と称された電光石火の進軍で瞬間に、ガーランド、ラスティア、コーウエルの隣接国を制圧し、『上帝』の呼び名を自らに与えた後には、バンセンノルム、マツケンゼンの西方二カ国をも手中に収めたのである。

トレボアの出現により、リルガミンは面積比で八倍、領民数では九倍に膨れ上がり、既知世界一の大国へと変貌を遂げたのである。

そうしたリルガミンの発展にも陰りが見え始めたのは、十五年前のことだ。これはケインやニトロ口が関わる公然の秘密となった事件である。トレボアに反旗を翻し、彼の電撃戦の力の源であったアミュレットを盗んで地下迷宮に立てこもった、魔術師ワードナが討伐された時のことである。ワードナを討伐したのはケインやニトロ口達後にリルガミンの騎士となった者たちを含むパーティだった。

ケイン達はアミュレットをトレボアに献上したりはしなかった。上帝の前に不意現れた彼らは、目の前でアミュレットを破壊し、トレボアのプライドを打ち壊してそこを去っていった。宮廷に出入りする貴族たちによれば、そのあたりからトレボアは人が変わってしまったという。常にオドオドし、背後を気にするような小心な人物になってしまったのだ。

そして、ワードナ討伐から九年後、トレボアは謎の失踪を遂げる。危機に陥ったリルガミンを救ったのもケイン達だった。古来よりリルガミンを守護する失われたニルダの杖を奪還し、進行してきたカル・オ・カリオン軍を撃退してみせたのだ。それにより、ケインとその仲間たちはリルガミンの騎士に叙任され、リーダーであったケイン自身は故郷ラスティアの地方侯爵位を与えられたのである。

トレボアの変貌、失踪、カル・オ・カリオンの進行という危機からリルガミンを救ったのは、ケイン達リルガミンの騎士と、彼らにそれを依頼したニルダ寺院の貴族僧ガゼ卿であった。だが、そのガゼの死をきっかけに、リルガミンの救世主であったケインがこの国の敵になろうとしている。

ガゼの死は邪悪な魔術師の陰謀とカル・オ・カリオンの進行、そして、リルガミン内部の彼に対する嫉視によって避けがたく起こったことであった。

ケイン達に殺されたはずの魔術師ワードナは古代魔法の秘術によって、霊体として生き続け、その邪法により、ニルダの杖を無効化

せしめたのである。この事態に対応したのもガゼ卿とリルガミンの騎士たちであった。ニルダの杖の効力を取り戻すことはできなかったものの、彼らは無名の大魔術師オーソンと力を合わせ、ワードナを退けるとともに、僅かな兵力と魔術師たちの協力を得て、地方駐留の大兵力が帰還するまでの間、カル・オ・カリオンの軍勢の進軍を押しとどめることに成功した。はずだった……。

リルガミンの中でガゼと対立する貴族たちの策謀により、間に合うはずの地方駐留軍は帰還せず、ケイン達も不在であったため、ガゼ自らが迎撃部隊を指揮せざるをえなかった。そして、敵将の手に落ちたのである。リルガミンに帰還したケインたちは戦場でもその武勇をいかなく発揮し、カル・オ・カリオン軍は主将グラムドレイクと副将ゴラを討ち取った。リルガミンは勝利をおさめることができたが、死を掛けたガゼの功績が讃えられることはなかったのである。

本来、ケインはトレボーに憎しみをいだいており、密かに拳兵の準備すら進めていたことをニトロ口は知っている。同時に、ケインは城塞都市としてのリルガミンを愛しており、戦禍に巻き込まれることは望んでいなかった。だが、この街への愛着も、ガゼに死によって薄れていった。ケインが反旗を掲げることがためらっている理由は、この街に住む既知の者達のことばかりだからである。

だが、マツケンゼンとバンセンノルムがリルガミン軍を退け独立を果たした今、ガーランド、コーウエルでも再び反旗が翻ることは間違いなく、ケインが統治するラスティアのみが平穏でいられるはずもない。戦乱はすでに避けられない状態にあった。古代からの既知世界の歴史を収めたウィルダ史書と並び、後世にウィルダ史書より後の歴史が収められた史書、ウィルダ全史記では、一年前のマツケンゼンでの拳兵、それと前後するカル・オ・カリオン軍の進軍から二十年戦争の始まりとする記述がある。

二ト口は憂鬱だった。憂鬱は二ト口には似合わない。だが、ケインにも似合わなかった。体内にトレポーへの巨大な憎悪をたぎらせていても、ケイン・ノーザンライトは明るく陽気な男であった。その男が長らく苦悩している様など二ト口は見えていたくなかった。だが、何かを決めかねていることでは自分も変わらない。これから戦乱の世の中で、風来坊の二ト口・キッドがどう生きていくかを決めかねているのだ。

二ト口は自分の宿と別の方向に向けて歩んでいた。すでに深夜というよりも未明と断言していい時刻だ。懐にしまっているゼンマイ式の時計”ニルベルグの卵”を見なくともわかる。この時刻でもリルガミンの歓楽街では人出が絶えることはない。その間を縫って、二ト口は暗い裏路地に入り、少しだけ広い空き地にでた。

「この俺様を尾行しようなんざ百万年早いぜ？」と言っても、ま、尾行自体はなかなか上出来だ。だが、強請の相手の選び方は完全に素人だな。リルガミンの街で盗賊二ト口・キッドに強請にかけようなんて奴はモグリだぜ……」

振り返った二ト口がふいにつぶやくように言った。少し前から、自分をつけてくる三名の男たちに気づいていた。尾行の技術自体は彼自身が口にしたとおり、なかなかのもので、二ト口でなければ気づくことも出来なかったろう。だが、そもそも二ト口・キッドを備考して何かをしようということ自体が無謀であるとも彼は言っているのである。

二ト口は尾行者が焦って襲いかかってくるか、逃げ出すかだと踏んでいた。だがその反応は彼にとっても意外なものであった。二ト口が潜んでいると目星をつけていた建物の屋根から音もなく三人の男が舞い降りてきた。それも、二ト口に攻撃を仕掛けてくるのではなく、綺麗に整列してその場に跪いて見せたのである。

あっけに取られている二ト口に、リーダー格と思われる男が丁寧な口調で話しかける。

「大盗賊ニトロ・キッド様。あなたを我々リルガミン盗賊ギルドの首領としてお迎えに上がりました」

「は？」

ニトロには珍しく間抜けな声を上げてしまう。盗賊ギルドの存在はもろろん知っている。昔はリルガミンの近く、黒鳥の森に拠点を築き、既知世界の大部分を縄張りとした大勢力であった。百年近く前にニルダの杖が失われた時のダパルプスの反乱に際して、アラビク王子とマルグダ王女に協力したとも言われているが、トレボーによる討伐と内部対立から勢力を失い、本拠であった黒鳥の森の縄張りすら失っている。

「あなたがお持ちのリユート、それを譲った人物は老齢のホビットではありませんでしたか？」

ニトロは表向きは吟遊詩人として旅をしているが、それは、その男が言うとおり、旅先であった老齢のホビットから魔法のリユートを譲られてから始めたことである。歌い手の実力にあわせて、より美しい音色を奏でるこのリユートを手にしてから、ニトロは別に盗賊の仕事をしなくても、一財産作れるぐらいの稼ぎを上げることができるようになった。

もつとも、吟遊詩人としても盗賊としてもあくせく働いて稼ぐなどニトロには毛頭ない。歌いたい時に歌い、気に入った城や屋敷があれば忍び込む。趣味の範疇でやっていることで、放浪に耐えられる程度の稼ぎが挙げられればニトロは満足であった。

「そんなことはもう覚えてない」

嘘である。だが、わざわざ本当のことを教える必要などあるだろうか？おそらくは、彼らはそれを知っているのだから。

「そのホビットの名はローキーと言います。代々我々盗賊ギルドの首領に受け継がれてきた名前です。その名とともに、魔法のリユートが証として次代の首領に引き渡されて来たのです。大盗賊にしてリルガミンの騎士たるニトロ・キッド様。先代はあなたに首領たる地位を受け継がせたのです」

「そんな意味があるなんてのは知らなかった。返してもいいか？」  
二ト口にしてみれば、話のウサン臭さはともかくとして、たいした勢力もない群盗共の首領なんぞにおさまるつもりはさらさらなかった。うつとしいだけである。

「先代は、十年ほど前に自分の地位を受け継ぐ者を探しに旅に出られました。戻ってきたのは、五年前。その時にはすでにそのリユートをお持ちではありませんでした。自分の死後、リユートを持つ者を探して、次の首領として仰ぐようにと……」

「ずいぶんと勝手な話だな……」

イライラが顔に出てしまっている。だが、それもどうしようもなかった。そもそも話が噛みあっていない。一方的に相手の事情を聞かされて、反論すらさせてもらえないのである。

「我々は二年ほど前から、リユートをお持ちなのがあなたであることに気づいておりました。試練場時代から大盗賊と言われ、リルガミンの騎士にまで叙任されたあなたのこと、先代の判断には納得しておりましたが、あなたが素直に我々の上に立っていただけとは思われなかったために、今まで時間がかかった次第です」

「今なら俺がお前等の上に立って首領とやらになるってか？ いったい何の根拠で？ 昔はいざしらず、本拠すら奪われて細々と続けている、木っ端みたいな盗賊団の首領に俺様になりたがるとどうして思えたのかねえ？」

二ト口は馬鹿にしたような口調で言った。もう、不機嫌を隠すつもりなどない。

「時代が変わりました。戦乱の時代こそ我々盗賊ギルドの真価が問われるのです。ダパルプスの反乱の際にはリルガミン王家に味方しましたが、我々は今のリルガミン王家には魅力を感じておりません」  
「で、肩書きこそ偉そうだが、実際にはただの風来坊の俺をどうして首領に仰ぎたいんだ？」

「あなた様を首領に仰ぎ、我々はラスティア侯爵に使えたいと存じます。そうであれば、あなた様にも首領をお引き受けくださること

「と思い、本日罷り出た次第です」

「っ!？」

ニトロが驚いたのは、ラスティア侯爵の名前が出てきたからではない。おそらくは誰もが知っており、また、リルガミンの人間は恐れ、それ以外の人間は期待してもいる。ケイン・ノーザンライトは必ず挙兵し、ラスティアを独立させるであろうことをである。そのケインとニトロの関係を知らない者も滅多にいない。リルガミンの騎士に叙任された話は有名だからである。

ニトロ・キッド自身が吟遊詩人達の奏でる物語に登場する人物なのだ。彼を驚かせたのは、彼らが『ニトロを首領としてラスティア侯に使えたい』と言ったからである。単にケインに味方したいのであれば、ニトロが首領となる必要などない。直接ケインに言えばすむことである。

「ケインの力になりたいのなら、直接本人に話にいけばいいだろう?」

「ノーザンライト侯が承諾してくださるはずがありません・・・」

「まあ、そうだろうな。あいつは戦争をすることすら今は決めかねている」

やや危険な情報も口をつぐむ理由を失っていた。考えていた以上に、今でもこの盗賊ギルドは力を持っているのではないか。本拠地を失ったと言っても、盗賊の集まりにとってはそんなものはなくとも構わない。むしろ本拠地から腕利きの盗賊たちを解き放って、巨大な情報網を築き、戦乱に備えていたのではないかと思われたのだ。

「ノーザンライト侯が挙兵し、ラスティアを独立させ、ゆくゆくはリルガミンに代わってこの既知世界を治める帝王となっていたいただきたいのです。が、おっしゃるとおり、ノーザンライト侯が承諾されるはずありません。ご本人にも気づかれずに秘密裏に大事業に協力するため、あなた様を首領に迎えたく存じます」

「つまり、本人にも内緒で俺に盗賊ギルドの組織を使って、ケインを担ぎ上げると?」

「そついう事でございます」

ニトロはそれ以上何も言えなかった。戦乱が長引けば、気楽な放浪も吟遊詩人もままならなくなることは目に見えている。ただのコン泥として生きていくのも悪くはないと思っているし、戦乱のない遠くの国へ放浪の範囲を広げるといふ考えもあった。だが・・・

『ラストティア国王ケイン・ノーザンライト』

この言葉がまばゆいほどの輝きを放ってニトロの頭に浮かぶ。自分が見えらくなることになどまったく興味はない。ケイン自身も権力に対する欲求とは無縁の男だ。だが、そのケインが故郷で王となり、既知世界に覇を唱えるという未来像は魅力的であった。手強いダンジョンに挑むような、まだ若かった頃、試練時代にはいつも感じていた未知への挑戦への渴望が蘇ってきたのだ。

この日、ニトロ・キッドは宿には帰らなかった。部屋に残された荷物や金もそのままである。挨拶もなしに旅立っていくのは、このところ珍しかったので、ギルガメッシュはいぶかしんだ。これ以降、リルガミンでニトロ・キッドの姿を見た者はなく、彼は歴史の影に潜むこととなる。

リルガミン盗賊ギルドの首領ローキーの名が事情通の間で囁かれ始めるのは、しばらくたってからのことであった。

## シルヴィ・プリス

「いいわね。アレックス。魔力はあなたの体のうちにある。その大きさは生まれつきの才能と日々の努力、そして精神の集中で高めることができるわ。でも、その力を制御するのは確実な呪文の詠唱と印の結び方によるの。確かに人間であるあなたはエルフ族程の魔力を生まれつき持っているわけではないわ。でも、魔力の大きさだけが魔法の効力を決めるわけではないの。巨大な破壊呪文は使えなくとも、精緻で安定した効果を得られる呪文が唱えられれば、それは巨大な魔術にも抗する力を得ることになるわ」

「先生。わかりました。魔法の特質をよく知ることができて、精密に発動させることができなければ、応用することも難しいということですね」

「さすがは天才アレキサンダーね。理解が早いわ」

エルフの隠れ里は、ラスティアとコーウエルの国境沿いにある広大な森の中に存在する。ラスティアからさらに北、ノゼルハイムの荒野にあったと言われるエルフの古代国家ケイリオン王朝の末裔たちは、神意によって王朝が滅びた後、本来の自然と平和を愛する本性を取り戻し、新興種族である好戦的な人間たちから身を隠すために各地の山や森の中に身を潜めた。

例外的なはぐれ者を除き、エルフたちはそのささやかな隠れ里から外に出ることは稀である。それは、エルフに限らず、ドワーフやホビット、ノームと言った亜人間の知的な種族たちも同様であった。リルガミンだけが特殊であったのだ。各種族のはぐれ者たちは何らかの理由でそのコミュニティを追われた者がほとんどであった。

あるいは外の世界に憧れ、周囲がとめるのも聞かずに飛び出していった者達もいるが、そうした例外的に好奇心旺盛な彼らはリルガミンという魔都の中に取り込まれ、人間のみならず、本来対立関係

にある種族とも交わって生活を送っていた。

エルフ族の中でも巨大な魔力から尊敬を集めるシンシアラ  
俗名シルヴィ・プリス　　は、少女時代に隠れ里を飛び出し、リ  
ルガミンで地下迷宮の魅力に取り憑かれ、冒険者としてケイン達と  
共に青春を過ごしたが、その後は、隠れ里に戻り、何度か仲間たち  
の求めに応じて外の世界でその魔力を奮いつつも、普段はエルフ族  
の魔術師の後継者を育てるために魔法学校の教師をしていた。

極めて珍しいことに、シルヴィの村には一人の人間が定住してい  
た。本来なら決して許されなはずだが、シルヴィの魔法学校に生  
徒として通うことも許されている。シルヴィの親友にして、エルフ  
族からも尊敬を集めるリルガミンの騎士、バイオレットとその夫へ  
イストスの息子、アレキサンダーことアレックスである。

「すごいなあ。アレックスは。実際に使える魔術は初級でも、魔法  
体系への理解については、僕らでも及ばないレベルだよ」

「あら、ルサスは魔術を使うことだけを考えて、座学をおろそかに  
してるだけでしょ？」

「ルミアエラっ！じゃあ、アレックス以上に君は魔法体系に詳しいの  
か？」

「あなたほどは理解に乏しいわけじゃないってだけよ・・・」

ルサスはルミアエラのことを憎からず思っているので不機嫌であつ  
た。ルサスはシルヴィの生徒の一人で、魔術の才能もそこそこにあ  
るが、同時に弓の名手でもある。

エルフ族は体力的には人間族に劣る。すばしっこいがそもそも体  
力において劣るのだ。剣や槍を持って戦うことには最も向かない種  
族であるが、集中力を要する弓などの武器についてはその扱いに優  
れている。

エルフ族と言えど誰もが巨大な魔力を誇っているわけではない。  
人間の中に入って活躍するのは、魔法使いや僧侶、ビショップと言  
ったクラスの者達だが、隠れ里の中ではルサスのようなレンジャー

も重宝されていた。

ルミアラ 俗名ルウ

モシルヴィの生徒の一人である。

シルヴィに憧れ、外の世界に飛び出し、ケインと共にニルダ寺院の攻略に挑戦したことがある。力が及ばず負傷し、ニルダの杖を取り戻したあとにシルヴィと共に隠れ里に戻ったが、それ以降も真面目に修行に取り組み、今ではシルヴィに次ぐ実力の持ち主と評価されていた。

「ルサスっ！ルミアラっ！サボってないであなた達も、ちゃんと勉強しなさい！じゃないと実験に使うわよっ！」

シルヴィの『実験に使う』という脅し文句はこの隠れ里では極めて強い脅し文句だった。シルヴィは実戦でえた経験を実験によって強化するため、鋼鉄製の専用の実験室まで用意して、日夜研究に励んでいる。だが、彼女の実験はその巨大な魔力を高いレベルで制御しなければならぬものばかりで、しょっちゅう失敗しているのだ。エルフの長老たちに言わせれば、シルヴィの研究課題は荒唐無稽なほどに理想が高すぎ、シルヴィと言えどそんなことが簡単にできたなら、魔力の力で世界が崩壊しかねないとのことであった。

すでにエルフの魔法使いシンシアラの魔力は古代の魔法君主や伝説の中の大魔術師達に伍するところまで来ているのであるが、本人はまったくそんなことには気づいていなかった。

「はい。先生。でも、ルサスはんまりやる気がないみたいですよ……」

「なっ！ル、ルミアラっ！」

「はいはい……あんたたち！いい加減そろそろいい歳なんだからいつまでも子供みたいにじゃれ合ってるんじゃないわよ！」

エルフの里は牧歌的な風景ののんびりとした雰囲気のある場所なのだ。シルヴィの周囲だけは常に賑やかだった。長老たちの間では彼らのことをうるさがる連中もいるが、一方で、エルフ族の未来を考えたとき、エルフ族の寿命からすればまだまだ若く、強大な魔力を

持つシンシアラの力が必ず必要になることを悟っていたのであった。

授業が終わった夕方からは、実験室で研究に勤しむのが彼女の日課であった。アレックスはと言うと、授業が終わったあとは、村中の書庫をめくり、ありったけの本を次々と読破していくのが習慣になっている。ルサスはしきりにルミアを遊びに誘うのだが、生真面目なこの娘はアレックスと共に書庫に籠るか、自分の魔法の研究に時間を使うことが多かった。

「し、シンシアラっ！大変だっ！」

「えっ？なにっ？ルサス・・・今手がはなせな・・・ああああっ！」

どーんという大きな音ともに、窓や玄関から炎が吹き出す。長らく研究中の爆炎呪文のかけ損ないである。もつとも、シルヴィであればこそ、これだけの爆発を起こしても無事なのであって、同じことと別人がやろうとすれば、自らの魔力で身体がバラバラになることだろう。彼女の制御力があればこそ、ギリギリのところでも威力を抑えることができるのであった。

「ああ・・・また失敗したじゃないの・・・で何？」

ギロリとルサスを睨みつけた。どうも、ルサスが実験室に訪ねてくると実験が失敗すると愚痴ることがある。それは偶然で、そもそも実験中にこの建物に近づいてくる者など他にはいない。

ルサスは狩猟道具を背負っていた。ルミアが付き合ってくれないので一人で鳥でも取りに出かけていたのだ。が、その手にあったのは、獲物の鳥や小動物ではなく、丸められた羊皮紙であった。

「手紙？どこでそんなもの受け取ったの？」

エルフの隠れ里はその名の示すとおり、人間などの他の種族から身を隠すため、エルフ固有の幻術によってその入口を隠している。偶然迷いこむようなこともありえないし、入ろうと思ったところで、身内の者以外が入り口を見つけないことは困難である。今まで、案内なしにこの里に入り込んできたのは、ケインだけであった。ケイン

自身が自分に同種の幻術を掛けて正体を隠していたために幻術の特性を知っていたからで、そんな人物は他にいようはずもなかった。

「エルフではあったけど・・・見たことない奴だった。背が私より低くて・・・腰に短剣を指していた・・・そいつが何も言わずにこれを渡したんだ。ほら、エルフ語でシンシアラへって・・・ここに書いてある・・・」

エルフの隠れ里はもちろんここだけではない。だから、見たことのないエルフというのは外にできればいくらでもいるが、幻術で隠された入り口を発見するとなれば優れた魔法使いのエルフだけだろう。だが、ルサスの言う人物の服装は魔法使いのものではない。

「はあ、よくわからないわね・・・まあ、読んでみるわ・・・」

シルヴィはルサスから羊皮紙を受け取ると、すぐに紐を解いて読み始めた。程なくして読み終わると同時に、シルヴィはほとんど一息に短い呪文を唱えた。

「ハリトっ！」

ごくごく小さな炎が彼女の指先に現れ、羊皮紙を一瞬にして燃やす。紙が地面に落ちる前に全て燃え尽き燃やした痕跡すら残さない。ハリトは最も初歩的な呪文ではあるが、それを使ってこのようなことが出来るのは彼女だけである。

「し、シンシアラ・・・何で？」

「人に見せられるような手紙じゃなかったから・・・それより、ルサスっ！ルミエラとアレックスを呼んできてっ！すぐにっ！」

「あ、ああ」

ルサスはシルヴィの剣幕に思わず後ずさったが、すぐに気を取り直して二人がいるであろう、書庫へと走っていく。

ルサス共に二人がシルヴィの自宅に現れた後、短い時間の打ち合わせが終わったと、シルヴィは一人で最長老の元に向かった。最長

老はシルヴィの求めに応じ、五人の長老たちを呼ぶ。このささやかな隠れ里の治めているのはこの老人たちであった。エルフの寿命は長い。功労達は全員百才を超えている。彼らはシルヴィの話にワナワナと体を震わせていた。平和を愛する大人しいエルフ族が怒りに震えているのである。

「シンシアラよ・・・自分の言っていることがわかっておるのか？  
エルフにしてはすいぶんと恰幅のいいノーラトという長老が最初に声を上げた。語尾は震えている。

「はい。この隠れ里を出ます。恐らくは帰っては来れないでしょう  
「人間たちの間でどんあ凄惨な戦乱が起ころうとも我々エルフ族とは関係ないっ！なぜ、そのようなことにかかわり合おうとするのだっ！」

「私もエルフ・・・平和と自然を愛し、戦乱は好むところではありませんん・・・」

「では、なぜっ！？まして、自分の愛弟子である若者たちを連れて行くっ！？」

「私たちエルフ族の未来のためです・・・」

シルヴィは穏やかな表情のまま静かに言葉を続けた。

「この戦乱は人間たちが封印していたはずの・・・魔法戦術が本格的に使われることになります。どこの国の権力者であっても、我々エルフの魔力に目をつけてくることは間違いありません」

「それをこちらから媚を売って、高く売りつけようともいうのかっ？」

「そんなつもりはありません。しかし、この里に隠れ住むことはいつまでもできることはありません」

「馬鹿なっ！人間たちがそうそう簡単にここに来ることができるものかっ！」

シルヴィの顔にに一瞬哀れむような表情が浮かぶ。長老たちはこの里から一步も出たことがない者が多い。若い頃から外界で過ごしてきたシルヴィと違い、人間たちの力を甘く見るところがある。

「私に限らず、エルフ族の中にも人間の世界に身を遠じたものは多くおります。その中には幻術についても知る者がいることでしょう。実際、この知らせを私にもたらしたエルフも人間の組織の中で働いている者でした」

「エルフ族がこの里を滅ぼす人間たちの手助けをするというのかわかっていますか？」

「人間の社会に溶け込んだ者たちの中には、自分の生活と地位を守るために必死になり、それこそ媚を売る者たちもいます。まして、人間たちの中で権力を握ろうと考える者であれば、手段は選びますまい」

ノーラトは、シルヴィをきつく睨みつけた。

「お前もかっ！お前もあのケインという人間に媚びて、この里のエルフ達を人間たちの戦争に駆り出そうというのかわかっ！」

シルヴィがケインやアレキサンダーなどをこの里に入れたことについては、長老たちはあまりよく思っていないかった。以下に信頼できる人物であっても、人間である。エルフは人間とはかわからず、静かに里で暮らせばいいというのが老人たちの考えであった。

「ケイン・ノーザンライトは我々にそのようなことは求めますまいですが、力を貸すならば彼が一番いいのです。我々の力を貸すことを条件に、この里のエルフ族の安全を計るしか手はありませんまい。一番信頼できる人物、彼にこそエルフ族の未来を託すべきと存じます」

決して大きな声ではない。だが、シルヴィの声には抗いがたい強い意志が籠められていた。ノーラトは口をパクパクとさせて何も言えなくなってしまうた。

「シンシアラ・・・お前はこの里を捨てよと申しているのか？」

しばしの沈黙の後、最長老が始めて発言をした。寿命の長いエルフの中でも、最高齢の二百歳。ここまで生きることがエルフでも珍しいことであった。かつて、巨大な魔力を誇り、この里を守ること

に尽力したが、その魔力ゆえに長命を保つことが出来ている。

「はい・・・すぐにではありませぬ。ですが、ガーランド、コーウエルの二カ国でも反乱軍が立ち上がれば、必ずこの里に注目し、自分たちの尖兵とするために攻めて来ることでしょう」

「お前がケイン・ノーザンライトの元に行き、力を貸すことで、それが防げるというのか？」

「いえ、この里は捨てざるを得ません。私が条件に出すのは、戦乱が終わるまでの間、この里のエルフ全員を彼の元で保護するという事です」

「信用できるかつ！人間だぞっ！我々エルフ族をないがしろにする者共だっ！」

「ノーラト・・・やめよ・・・全ての人間が信頼でききないというなら滅ぶしかない・・・そういうところまで来ているとシンシアラは言つておる・・・おそらくは・・・真実なのである。外界のことは彼女が一番よく知つておる・・・」

「さ、最長老・・・」

ノーラトは言葉を続けることができなかった。薄々感じてはいたのだ。人間たちは世代を重ねるごとに力をつけてきている。繁殖に力に劣るエルフはその魔力によって人間たちに干渉に抗して来たが、それにも限界が来たのだ。

「だが、シンシアラよ・・・そのケイン・ノーザンライトが信頼に足るか・・・それはまだ確信できぬ。外界にはお前と・・・お前の生徒から二名を選んで連れていけ。それ以上は当面はならぬ」

「もとよりそのつもりでございます。長老方に納得いただけるかどうか、実際にこの里に驚異が迫った時に構いませぬ。その際には直接ラスティアの農園にマロールで全員をお連れください。それまでのことは・・・私が全責任を持って・・・」

バシッと、最長老は机に手を叩きつけた。

「シンシアラよ・・・全責任を負うなどと軽々しく口にするな・・・が、お前の好きにすると良い。なるようにしかならぬわ・・・」

「ご理解いただきありがとうございます……」

「もう行け……あの、人間の子ども連れてな。お前がいなければ預かるわけにも行かない……」

「承知いたしました……」

自宅に戻ると、彼女の教え子たちはすでに支度を済ませていた。

「先生……」

「長老たちの許可が降りたわ……私たちに関しては勝手にすれつて話ね」

「じゃあ、ここにはもう戻ってこれませんね……」

「そうね……じゃあ、やめる？ルミアエラ？」

「いえ、戦争は嫌いですけど……ケインさんと一緒なら……」

ルミアエラはケインとともに地下迷宮で戦ったことがある。ケインの心の強さをよく知っていた。

「私も外界に出てみたかった。戦争つてのは好きじゃありませんけど、やれることがあるならなんでもやりますよ」

ルサスもケインとは面識がある。僅かな時間の間でしかないが、信頼していい相手だと考えていた。何より、この里の若者達はみなシルヴィの口からなんども彼の話を聞かされていたのである。エルフと言えども若者の間には英雄崇拜の思想がある。彼らに取っては憧れの人物なのであった。

「アレックス、あなたの修行はまだちょっとしか進んでいないけど……続きは外界でもできるわ」

「はい。私もケインさんの力になりたいですっ！」

「そうね。必ずあなたの力が必要になるわ」  
気がかりなことは一つだけあった。アレキサンダーの両親、バイオレットとヘイストスのことである。両親の許可もなく危険なことに巻き込むぐらいなら、二人のいるグリスク村まに帰した方がいいのかもしれない。

「ケインさんや先生が戦うというのに、何もせずに帰ったりしたら

母上に折檻が怖いです・・・」

シルヴィは少しだけ親友の教育方針を忘れていた。

「そうね。まあ、いずれ必ずバイオレット達にも会えると思うわっ  
！」

その夜、エルフの隠れ里から、三人のエルフと一人の人間の姿が消えた。エルフの隠れ里にとっては、表面上はたいした事件ではない。だが、この里だけでなく、エルフ族の未来は全て、方向音痴の女魔術師の肩に掛かっていることを、最長老だけは見抜いていたのである。

## グリスク

### グリスク。

リルガミンの遙か南方にあるこの村はこの国にも属していない人口二百名程度の小さな集落でしかない。村は人口希薄地帯にあり、何処の国もそのようなささやかな集落を領土にする動機を持たないが故に豊かとは言えないまでも、平穩に暮らすことができるのである。

この村には二人の英雄、正確に言うならばひとつがい（・・・）の英雄がいた。リルガミンの騎士に叙任された大男の戦士ヘイストスと女戦士バイオレットの夫婦である。共にケイン・ノーザンライトと共に、パーティの前衛に立ってモンスターと切り結んできた腕利きの武者である。

二人の息子であるアレキサンダーはこの半年、バイオレットの親友であるシルヴィ・プリスの元に預けてあった。最愛の息子を預けることは当然寂しかったが本人の強い希望があり、また、シルヴィならば安心して預けることができた。

これから、既知世界全体を巻き込む戦乱が巻き起こることは間違いなかった。それは、無骨な二人にも理解できる。リルガミンから遠く離れたグリスクではあるが、カル・オ・カリオンからは程近いリルガミンの属州となっていた王国が次々と反乱を起こせば、当然、カル・オ・カリオンはそれに漬け込んで、リルガミンへの進軍を開始する。

そうなれば、カル・オ・カリオン内部やリルガミンとは別の隣国でも、また新たな野心が芽生えてくることがある。時代は急速に平穩から凄惨な戦乱の時代へと変わっていく。それは、さけられないことのように思われた。そして、その認識ですら、甘かったということに、この日、二人は気づくのである。

ヘイストスの一家は、狩猟で生計を立てていた。バイオレットと結婚してからは夫婦で狩りに出る場合も多い。その巨体から一見大雑把で粗野に見えるヘイストスであったが、狩人としては慎重で繊細な心遣いを見せる。怪物や人間を相手にする先頭だけでなく、こちらも一流の腕前を持っていた。

午前中、早朝から夫婦で出かけた二人は、昼時にはその日の獲物を持って帰宅した。この日仕留めたのは大きな水牛である。久々の大物に多少気分を良くしたバイオレットは、珍しく昼食の準備を義妹に任せずに、獲物をさばいて調理を始めていた。

「兄さん！義姉さん！大変ですっ！」

突然、井戸に水を汲みに出ていたアデリアが家の中に駆け込んできた。血相を掻いて走ってくるなど、この美しい妹には珍しいことだった。

「アデリアっ！どうした？」

いつも無口な兄、ヘイストスも何か不穏な空気を感じ取っていた。「か・・・カル・オ・カリオンの兵士たちが、百名ぐらいでやってきて、今、長老と話しています」

「カリオン軍が？あいつらがこの村に何の用があるってんだい？」

バイオレットは怪訝そうに義妹を見た。バイオレットは相変わらず口が悪い。若い頃、試練時代からその美貌や戦士としての力量以上に彼女の名を知らしめたのはその毒舌であった。だが、夫と息子、義妹のアデリアに対しては優しい妻であり、母であり、姉であった。

「兄さんと義姉さんを・・・引き渡せと・・・」

二人共これですべてわかった。僅か数ヶ月まで、ヘイストスはカル・オ・カリオンの重要人物を一人、戦場で討ち取っている。リルガミン遠征軍の司令官グラムドレイク將軍をだ。

それ以前にも五年ほど前の第一次リルガミン遠征において、グラムドレイクの軍と戦い、獅子奮迅の働きを見せたのは結婚前のヘイストスとバイオレットである。やはり、数カ月前の戦闘でケインによって討ち取られた副司令官ゴラはカリオン軍内において、地獄耳と言われる情報通だった。おそらくは、バイオレットとヘイストスのことも生前に全て調べてあったのではないかと思われる。死後、その資料が他の貴族や将軍たちの手に回ったなら、二人の事を殺すか、自分の陣営に取り込めないかを考えるだろう。

二人共素直にカル・オ・カリオン軍の軍門に降るつもりは毛頭ない。だが、黙って逃げたりすれば、村に迷惑がかかることは目に見えていた。止めようとするアデリアには何も言わず、夫婦は息を潜めて、長老たちと会談する兵士たちの様子を伺った。

村の中心部には小さな広場がある。年に一回の祭りや、何かの祝い事の際には盛大な火祭りが行われる場所である。長老と他の村人たちは、カル・オ・カリオンの紋章が入った装備で身を固めた兵士たちに包囲されていた。恐怖に身を震わせる村人をかばいながら、齢百歳に到達しようという老人が傲然とうそぶいた。

「かつて、ヘイストスは妹のアデリアを守るために戦った。アデリアはヘイストスの妹だが、この村にとつて太陽に等しい存在の娘だった。そのアデリアを救ったのはリルガミンの貴族僧であるというガゼ様だった。今回、ヘイストスがグラムドレイクなる将軍を倒したのは彼への仇討である。それも戦場でのこと。カル・オ・カリオン軍には戦士の誇りと道理はござらぬのか？」

ヘイストスの妹、アデリアはかつて、体が樹木に変わっていくという奇病、樹木病に冒されたことがある。ヘイストスは彼女を救うため、遠くリルガミンを訪れ、ガゼが治療のために村まで来てくれる見返りに、危険極まりない迷宮の探索に参加したのである。バイオレットとの出会いもそれがきっかけであった。

戦場でグラムドレイクを殺したのは、ガゼへの仇討ではない。そ

の時点ではガゼの死を知らなかった。ヘイストスがグラムドレイクを殺したのは、カル・オ・カリオン軍が道々で略奪を行ない、いくつもの村落が壊滅したのを目の当たりにしたからであった。その行動の原理は義憤と俠気であり、バイオレットも改めて夫の人柄に感じ入ったものである。

戦場での決闘の結果であるグラムドレイクの死をヘイストスの罪状とするのは本来無理がある。カリオン軍の武威が問われる行状であるが、カリオン軍の将軍たちは、どこの国にも属さない小さな村に住む彼らを蛮人と蔑み見下していた。蛮人相手に道理も仁義もないというわけだ。

長老の言葉は奢りたかぶったカリオン軍の指揮官を激高させるせるのに十分な刺を含んでいた。次の瞬間、指揮官はすでに抜き身のままになつていた剣を長老の胸に向かって突き出していた。小さくシワだらけの身体から驚くほどの量の血が吹き出す。ヘイストスとバイオレットの中で何かが音立ててはじけ飛んだ。

カリオン軍の兵士たちは何が起こったのかまったくわからなかった。気づいたときには長老を刺した指揮官の首は胴体からちぎれ飛んでいた。同時に周辺にいた兵士たちも槍や剣を構える暇も無く切り倒されている。ひとつがいのリルガミンの騎士はカリオン軍にとつて、死の旋風としか形容し得ない存在だった。全ての兵士は二人に近づくことすらできなかった。二十名程度の弓隊が二人を狙って矢を放ったが、まったく意味がなかった。夫をかばって前にでたバイオレットは、愛剣を凄まじい速さで左右に往復させ、全ての矢を切り払ってしまった。火炎魔法ですら蹴散らすと言われる彼女独特の剣技である。次の瞬間にはヘイストスの巨大な斧が弓手達を肉の塊に変えていた。

兵士たちの内、多少は気の利いた十数名はまともに二人と戦おうとしなかった。すでに指揮官はおらず、代わって指示を出せる者も

いなかったが、人数だけが多い。小賢しい策略を思いつく者も中にはいた。仲間たちがヘイストスとバイオレットに瞬く間に切り裂かれる中、彼らは長老の周りにいた村人たちを人質に取ろうと近づいた。

彼らは舐めきっていた。この一段は古株の兵士たちで、かつてはグラムドレイク将軍に従い五年前の第一次リルガミン遠征に従軍した者もいた。その時、丸一日に渡って、カリオン軍の兵士を切り続けた、この二人の強さを目の当たりにしている。だから、彼らが侮っていたのは、この二人のことではない。

二人が倒れた長老の近くから遠ざかった瞬間を狙って、周囲に村人達に襲いかかる。すぐに殺そうというのではない。武器を突きつけ人質にして、ヘイストスとバイオレットと交渉しようと考えたのである。だが、その目的は達成されなかった。

蛮人と彼らが蔑んだ村人たちも、殴られて黙っているほど大人しくはなかった。平和な村でのんびりと暮らしていた若者たちも、ここまで踏みじらわれては黙ってはいなかった。ヘイストス達の強襲の直後から、いつの間にか広場に農具や狩猟用具を持った若者たちが集まっていた。戦いには慣れていない彼らだが、乱戦においては中途半端な武術などむしろ有害であった。しゃにむに得物を振るう戦いの素人たちによって、訓練された兵士たちは忽ち原型を留めぬまでに打ち据えられた。体中の骨がおれ、皮膚は裂け、内臓が破裂する。

狂乱から冷めたとき、広場には百名を超える死体が転がり、残りばかりぢりになって逃げていった。

長老はまだ死んでいなかった。だが、もう手の施しようはない。この村には医者はいなかった。年齢に比して驚くべき生命力と精神力を振り絞って、長老は最後の言葉を告げた。

「ヘイストス・・・バ・・・バイオレット・・・村人たちを頼む・・・

「この村はもうダメじゃろう・・・あとのことは・・・二人に・・・」  
「長らく村人たちを支えてきた長老は、ヘイストスとバイオレットに村人たちの命を託した。」

「ヘイストス・・・いつたいどうすれば・・・」  
「つ、次はもつと大軍でやってくるぞっ！み、皆殺しになるっ！」  
「お、お前たちのせいだっ！」ヘイストスがいなければこんなことにはっ！」

村人の一部、特に震えていただけの年配の者たちが口々にヘイストスを罵り始めた。それに対し、若者たちはムキになって反論する。  
「長老が刺されても、震えて何もできんかった癖に何言っているんだっ！ヘイストスとバイオレットが戦ってくれなかつたら、とつくに今頃死んでたんだぞっ！」

「ヘイストスがいなかつたら、そもそも奴らはこの村に来なかつたっ！」

「村から一步の出たことがないからそんなこと言えるんだっ！大きな戦争が始まるんだぞっ！この村だっていつまでも平和なままでいられるはずがないんだっ！」

近年は若者たちは、近隣の都市ぐらいまでは出かけてくることが増えた。村で生産された食料や、獣皮などを売りに市場まで出かけてくるのである。素朴な村人の中でも若者たちは多少は世の中のことを知り始めている。

「みなさんっ！落ち着いてくださいっ！」

よく通る、若い女の声が黄昏と流血で朱に染められた村の広場に響き渡った。

「長老は兄と義姉に村を託すと最後におっしゃいました。このような事になった責任の一旦は確かに兄にあります。でも、今、この状況で私たちの命を預けられるのはこの二人しかいないのではありま

せんか？」

アデリアであった。アデリアは二人が飛び出した直後、刺された長老の側に駆け込み、身を呈してかばっていた。若者たちが飛び出してきたのは、アデリアの身に危険が迫ったからでもある。彼らにとっては、アデリアは女神そのものであった。

「そのとおりだっ！アデリアの言う通り、今はヘイストスに従うしかないっ！」

「そうだっ！俺達はヘイストスとバイオレットについていくぞっ！」  
若者たちの意見が老人たちを圧倒した。老人たちには具体的な方針など何もだせなかったのだ。平和な時代の中で人生の殆どを歩んできた彼らには、これからの戦乱を生きにく知恵はなかった。

「ヘイストス……」

バイオレットは夫の顔を覗き込んだ。こうなった以上、村人の命と生活はすべて自分たちの判断に掛かっている。

「村を捨てよう。みんなでケインの元に身を寄せるんだ」

「ええ。ケインの所ならこれぐらいの人数でも引き受けてもらえそうだ。それに……戦争が始まるなら……」

バイオレットはそれ以上言葉を続けなかった。バイオレットもケインの素性と内秘めた憎悪を知っている。反リルガミンの気風が全ての属州に吹き荒れる今、どんなに逡巡を覚えていようと、ケインが動かずにいれるはずはない。ケインの拳兵に手を貸し、その見返りにグリスクの村人たちを受け入れてもらう。それしかなかった。

ケインであれば、仮に自分たちが手を貸さなくても村人たちを受け入れてくれるかもしれない。だが、それでは、彼の立場を危うくするだけだろう。私情で動いたと思われるのは反乱軍の司令官など務まるはずがないからだ。

本来、ヘイストスもバイオレットも国同士の戦争などにあまり興味はない。バイオレットはリルガミンで生まれ育ったが、国境など関係なく大地を放浪する自由民である。傭兵、冒険者、剣士、どう言っただけで見たところで、どこかの国のために死を掛けて戦うような身

分ではなかった。

だが、ケインのためであれば、それもやぶさかではない。バイオレットもヘイストスもそう思うのだ。常に先頭に立って自分たちを率いたリーダー。ケイン・ノーザンライトが統べる軍勢、彼が治める国であれば、そのために自分の人生を使ってみてもいいと思っただのである。

数日後、五百名を下らない兵力がグリスク村を強襲した。しかし、村に人気はなく全くのもぬけの殻であった。

## 稚拙な農

リルガミンの衛兵隊長ベルグは鬱々とした日々を送っていた。ガゼの死。それは、ベルグに深い悲しみを与えただけでなく、衛兵隊内での彼の立場を著しく弱いものとしたのである。

ガゼの死後、城塞都市の実権を握ったバルコスキー伯爵は、ガゼの関係者たちの排除を始めた。彼らしい、姑息で回りくどい手段である。それは、リルガミンの長老ホワイトストーンですら例外ではない。ホワイトストーンは長老の地位こそ失っていないが、月に一度のリルガミン王への謁見も許されなくなり、城塞都市の行く末についての意見を言う機会を失った。

ベルグの場合はより直接的な方法で、衛兵隊長の地位を失い一兵卒にまで格下げされてしまったのである。

この日は非番であった。ベルグが住んでいるのは城門から程近い下宿である。官舎が与えられる衛兵隊長から降格させられたために急遽入居した部屋であった。小さなテーブルと椅子、そしてベッドだけが置いてある、それだけの部屋である。

一人でも吞まずにはいられなかった。ガゼのことを思い出しながら、タンカードに注いだワインをあおり続ける。

「くそっ・・・もう終わりか・・・」

カラになったビンを乱暴にゴミ箱に向かって投げた。それはゴミ箱を外れて、壁に激突して碎ける。

舌打ちをしながら、割れたビンを片付けようと立ち上がり、壁に近づいたとき、ふと、立ち止まったベルグはテーブルの上を見た。いつの間にかそこに羊皮紙の切れっ端が置かれていた。

訝しげにそれを読み終わったベルグは直ぐ様それを暖炉に投げ込み処分した。

翌日、ベルグは城門の警護の当番であったが、出勤してこなかった。元上司を部下に使うという気まずい仕事を任された新しい衛兵隊長は、むしろホッとした様子で、気にも止めなかったのである。

ケインは狐に包まれたような気分であった。リルガミンの長老ホワイトストーンの呼出に、転移魔法マロールを使って翌日の夕方にはリルガミンにたどり着いたのだが、長老の屋敷に行ってみると留守だという。長老不在の屋敷に泊めてもらうのも気が引ける。パートナーであるエフリスの息子、二代目ボルダックを訪ねて店に行ってみれば、こちらでも商用で不在。ギルガメッシュの酒場まで来てみれば、ギルガメッシュも不在であった。

しかたなく、懐かしの冒険者の宿で泊まることにして、顔見知り給仕にワインを注文する。ケインの好みは若い頃と変わらない。作って間もない若いワインに薬味を入れずに呑む。保存の方法が革袋しかないため、時間の経ったワインにはどうしても匂いがつく。それを誤魔化すためにハチミツやクエンを加えるのが普通なのだが、始めてこの店を訪れた試練場時代からケインの酒の飲み方は変わらず、ブドウ本来の味を楽しむものだった。

「ノーザンライト侯じゃありませんか！この前はニトロ・キッド卿も来てましたぜ。またふらつといなくなりましたかね」

顔見知りの常連客だ。近所の小間物屋の主人だが、試練場時代には様々なパーティーに参加していた腕利きの戦士だった男である。がっちりとした体躯と、頬に刻まれた生々しい怪物の爪痕が昔の彼を忍ばせる。ケインがリルガミンを訪れた時にはすでに現役を引退していたが、試練場の思い出を語る相手としては話題に事欠かない。

「そうか。相変わらずなんだなあ。ニトロは・・・」

「いや、ここところは来るときは突然でも旅立つ前にはギルガメッシュのオヤジに挨拶ぐらいはしていくようになってたんですがね・

・今回は予定も告げずに急に姿が見えなくなりました。宿の主人の話じゃ荷物も置いたままだったとか・・・」

奇妙な話だ。気まぐれな二ト口のことだからありえない話ではないが、ケインがラスティア侯爵になってからは、お互いが立ち寄りそうところで当面の予定を告げて、所在を明らかにするようにしていた。

「ふむ、若い頃に戻ったつもりで適当な放浪でもしたくなったのかな・・・俺達もそろそろいい歳だし、昔を懐かしむ気にもなったのかもしれん」

「またまた・・・まだまだお若いじゃありませんか。もつともつとでつかいことだつてやれますぜ。天下のラスティア侯爵様がじじむさいこといつちゃあいけませんよ」

本来であれば、侯爵という高位の貴族にこんな口がきけるものではない。だが、ケインは望んで一般市民と気軽な付き合いをしている。貴族の若殿が開明や気さくな人物を気取つてそうするのは違う。ケインにとってみればこっちの方が当たり前で、今更貴族らしい態度などそれそもなかつただけのことであった。

酒はすすんだが酔えはしなかつた。気になることばかりで頭が混乱する。それほど切羽詰つた状況には思えないのだが、最近は自分の勘が鈍っていることを自覚しているから安心はできなかつた。

そもそもリルガミンまで急いだのは長老に会うため、留守となればその後は何の予定もなかつた。長老の屋敷の者によれば、帰りはいつになるかわからないと言う。いつまでもリルガミンで待っているわけにもいかない。明日は久々にニルダ寺院にでもよつて、クレアに会つてから、言伝を頼んでラスティアに帰ることにした。来る気になれば、ケインほどのマロールの使い手ならすぐに飛んでくることができると。刈り取り前の暇な時期とは言え、無意味に農園を留守にするわけにはいかなかった。

ボタンっ！

酒場の入口の扉が乱暴に開かれた。元々荒くれ者の冒険者が集まる店だったから、試験場時代では当たり前前の風景で、扉自体は頑丈に作られている。しかし、ここ最近では客層が変わってきたので、店の中の客は無礼な新入りが現れたと思つて、入り口の方を睨みつけた。

客ではなかった。完全武装した城の兵士たちである。城塞都市の防衛と治安維持を任務とする衛兵ではなく、正規の軍の兵士の武装であった。

「ノーザンライト侯爵。宰相バルコスキー伯爵の命によりあなたを拘束いたします」

「なんの理由で？」

さして抵抗の意志は示さず、単に確認のためと言つた調子でケインは尋ねた。ギルガメッシュに迷惑は掛けたくない。ここで騒ぎは起こしたくはなかった。

「あなたが反乱を企んでいるとの密告がありました」

「ふん。反乱を企んでいる奴がのうのと単身でこの街にあらわれるのか・・・まあ、いい。宰相閣下とやらにお会いすることにしよう」

ケインは素直に指示に従い、腰に下げた愛刀村正を兵士に渡した。兵士たちと共にケインが店を出ると、給仕と常連たちは慌てた。

「お、おいっ！ノーザンライト侯が連れてかれちまつたぞっ！」

「反乱の疑いつて濡れ衣もいところじゃねえかっ！」

「長老だっ！長老と・・・それからニルダ寺院に連絡しろっ！」

慌しく勘定を済ませた常連たちが、二手に別れて急報を告げに走った。

「ノーザンライト侯爵・・・こういう文章が城内に流布されてましてな・・・失礼とは存じますが、立場上あなたの釈明を聞かなければならない。私の立場というのもご理解いただければいいのですが」バルコスキーの言葉がやたらと丁寧になるのは、一つには形式だけとは言え爵位はケインの方が上だからである。バルコスキーは伯爵。侯爵よりも格が落ちる。

もう一つは、目の前の男が本気になれば、隣室に控えさせている護衛など気休めにもならないということ、部下たちに忠告されたからである。バルコスキーは半信半疑ではあるのだが、ケインという男は仮に素手であっても無防備とは言えないというのである。

今のリルガミンには侍型の戦士というのは極めて稀である。百年前、ダバルプスの反乱あたりの時代では、ガーランドには侍を育てる道場があったし、ダバルプスを倒したアラビク王子自身もそこで学んだ侍型の戦士だった。

だが、その後、東方世界とリルガミンとを繋ぐ長大な隊商道が周辺地域が戦乱に見舞われ、東方との交易が滞ってしまった。事実上東方世界とは断絶した状態となったため、侍や忍者と言った東方を起源とするクラスや文化は衰退していったのである。

だからバルコスキーはケインが魔法を使うことなど考慮できなかったのだが、部下たちはそれを知っていた。

バルコスキーが示したのは、あまり質の良くない羊皮紙の切れっ端であった。城内であればもっと上等な紙を用意できるはずで、これは城内の者の仕業でないことが一見して推測できたが、それはわざとらしすぎる。羊皮紙には短く次のように書かれていた。

「本日ノーザンライト侯爵はラスティア州における反乱の打ち合わせのため、リルガミン内部の協力者とギルガメッシュの酒場にて接触する予定」

あまりにも幼稚な罫であった。ケインは自分の勘が笑いたくなるほど鈍っていたということを理解した。長老の手紙は偽物・・・ではなく、五年前のニルダの杖奪還の際、ケインと仲間たちを探すた

めに長老とガゼがばら蒔いた手紙をそのまま使ったのだ。

それによつて、リルガミンの街にケインをおびき寄せ、反乱のことで身柄を拘束する。反乱の証拠などどんな幼稚なものであつても構わない。殺してしまえば、後付でどうにでもなるからだ。バルコスキー伯爵は自分を上帝トレポーと同等の策謀家であると考えていたが、実際には彼の謀略には馬鹿馬鹿しいほどの稚拙さが漂う。だが、それでも、今はその幼稚な策でケイン・ノーザンライトに死の危険が迫っていた。

ケインの手には武器が握られていない。敵は考慮してそうにもないが、魔法による攻撃では城ごと焼き払うことになりかねない。

「このような些事にまで、宰相閣下ともあるうお方が時間を費やされるとは、お気の毒に存じます」

「名指しであなたの名前が書かれている。これは、反逆罪に相当する罪です」

「ほう・・・羊皮紙に自分の名前が書かれていただけで、反逆罪に相当する罪になるとは・・・これは勉強不足でした」

バルコスキーが小刻みに震えた。賄賂と汚い策謀を用いてこつまで成り上がった男だが、発言には不用意なものが多く、策謀には緻密さに欠ける部分がある。彼がガゼを謀殺し、今の地位を得られたのは、あまりにも真つ正直なガゼが、国難に際してバルコスキーの存在を忘れ、隙を作ったからである。結果として、バルコスキーはガゼの功績を盗んだ上で、彼を貶め、今の地位を得ている。

「少なくともあなたには謀反の疑いが掛かつております。冤罪なら誤解が解ければ釈放となります。お部屋をご用意いたしますので、しばらくそこに滞在いただけますかな？」

軟禁すると言っているのである。が、そんなことは信用ならない。勘が鈍くなつたとは言つが、ケイン自身の危険を察知する嗅覚は、隣室に在るであろう百名単位の兵士の気配を感じ取っている。試験場などの迷宮での戦闘では視覚にばかり頼っているわけにはいかない。僅かな音や気配で敵の数や行動を把握せねばならないのだ。そ

れに比べれば、隣室に潜む兵士の群れに気づくことなど造作もなかった。

『大暴れして死んでやっても悪くはないな。大呪文は間に合わないが……』

ケインはバルコスキーを人質に取って、逃げることも考えた。だが、目の前の人物が本物のバルコスキーとは限らない可能性も考慮しなければならぬ。ケインはガゼの招きで何度か宮廷のパーティーに出席したことはあるが、他の貴族の顔や名前など覚える気は全くなかった。バルコスキーが本物かどうか判別できなかった。

『タイミングを計って目の前のバルコスキーに体当たりを食らわせる。慌てて兵士がなだれ込んできた瞬間に、高速詠唱で攻撃呪文を使い、兵士から武器を奪えば、まあ、この場を切り抜けることくらいはできるだろう』

漠然とこの場を切り抜けるプランは浮かんだ。だが、その後、自分はどうするのかは検討もつかなかった。

『まずは、目の前のバルコスキーにもつとぼろを出してもらおうか。本物なら、怒らせて人質に取る。偽物なら、返答に困った隙をついて、盾にする』

「バルコスキー閣下、この手紙を私に出したのもあなたですか？長老からの手紙だが、来てみれば長老は留守。留守を守る使用人たちも、私が呼ばれたことを知らなかった。リルガミン王国の宰相ともあるうお方がずいぶんと姑息なことをなされますな……」

わざと嘲り笑を浮かべながらケインは言った。本物なら逆上することだろうと思ってカマをかけたのだが、反応は意外なものだった。「……こ、こんなモノは私は知らない……」

ケインは怪訝そうな顔をした。表情を見れば本人が嘘を言ってい

るかどうかくらいはわかる。まして、バルコスキーは底の浅い男だ。城内にはらまかれていたという先程の紙片は、バルコスキーが用意したものだろう。必要もない演出なのだが、形だけでもケインを拘束することに法的な根拠を与えるためのものだ。

では、ケインをリルガミンに呼び寄せたのは、本当に長老で、たまたま急用で出かけてしまっただけなのだろうか。

だが、今はそんなことを考える時ではなかった。

「悪あがきはその辺にしていただきましよう・・・」

バルコスキーの行動は一貫性に欠ける。暴力的に身柄を拘束するつもりなら、稚拙な策略で法的根拠を作ることなど後回しにすればいいのに、手の内を晒してから行動にでたのだ。だが、今回に限ってはそれが功を奏する。

バチンッ！

突然、大きな音が室内に響き渡った。強力なバネの仕掛けが発動した音である。ケインのいる部屋の右側の壁に隠されていた石弓が矢を放ったのだ。

ケインは間一髪で交わしたが、矢は一本ではない。次々とケインを目掛けてボルトが打ち込まれてくる。

「マゾピック！」

高速詠唱法により防御系呪文を唱えた。マゾピックは対象者のアーマークラスを著しく下げる。頑丈な見えない魔法の殻に守られ、石弓のボルトは弾かれたように方向を変えてしまいケインには当たらない。

だが、だがそれも織り込み済みであった。

「モンテイノ！」

部屋中に響き渡る複数人の声が響き渡った。石弓の仕掛けの後ろには十人程の白魔法の使い手、主に僧侶として修行した者達が隠れていたのである。対象者の声を奪い呪文を唱えられ無くする呪文モ

ンテイノを唱えさせるためだけに、これだけの数の術者を使ったのは、ケインの魔法力が侮れないことを知っている者がいるからである。

高位の魔術師は、その魔力によって、他者の魔法を無効化することが出来る。ケインほどの魔力を操れば、モンテイノのような単純な魔術が効果を上げる可能性は極めて低い。それを、十人同時に唱えることで、成功率をあげようと考えたのである。

『ちっ……みっともない……魔法を封じられたか……』

十人分の沈黙魔法の全てを無効化することはできなかった。ケインは呪文を唱えることができない。

次の瞬間、入り口から部屋の中に完全武装の兵士達が殺到してきた。全員フルプレート鎧に長剣と盾を持っている。素手で抗し得るような数ではなかった。

『万事休すか……』

兵士たちがケインを包囲する。ケインは覚悟を決めた。

## 戦士の死

「ケインっ！これを使えっ！」

そう叫んだ声の主が誰かということはすぐにはわからなかった。ただ、歴戦の戦士の勘は、空中に投げ放たれた剣が自分の愛刀村正であることを告げていた。

周囲を兵士達に囲まれていたケインは弾かれるように動いた。長槍を突き入れようとしていた兵士に跳躍したケインは、その方を踏み台にして、さらに高く飛び上がった。空中で愛刀の鞘を掴む。銘を見なくとも、長年使い慣れた村正であることはわかる。

床に着地したケインは村正の鞘の部分を握ったまま、両腕を体の前で交差させ、低い姿勢で構えた。瞬間、周囲の兵士たちの動きが止まる。ケインの身体から発せられる殺気に彼らは戦慄した。目の前にいる男が伝説の戦士であることをいまさらながら思い出したのである。

「何をしておるっ！相手は一人だぞっ！」

バルコスキーが叫んだ。その声に反応して兵士たちが息を合わせ、同時に武器を振るう。

ケインに直接攻撃を仕掛けられる位置にいた、三、四名程の兵士たちは何が起こったかわからぬ間に死んでいた。両腕を前方に交差させた構え、しかし、まだ村正は抜かれていなかった。兵士たちはケインの死を確信していたのだが、次の瞬間にはケインは彼らの視界の中にいなかった。

交差させた腕を高速で開くと同時に、鞘から村正が解き放たれる。それと同時に、周辺の兵士たちから血しぶきが舞う。ケインの姿は陽炎のように、一瞬揺らいでみえた。距離をとって見ていたバルコスキーにもケインの動きは追いきれていなかった。剣を振るうのにぎりぎりの間合いで集まっていた兵士たちの間を、縫うように高速で移動しながら、彼らを切り裂いていく。

バルコスキーは、数ヶ月前のカリオン軍を撃退した戦いを正しく理解していなかった。ガゼと衛兵隊長ベルグの指揮する少数部隊は、魔法を使った濃霧の目眩ましを使って奇襲を掛け、返り討ちにあつてガゼは討ち死にした。その直後に戦場に到着したケイン達がグラムドレイクとゴラを倒したのだが、バルコスキーはケインたちも霧で身を隠して、本陣に近づいたのだと思っていたのである。

ガゼの死に衝撃を受けたケイン達は、戦場での働きを喧伝するよくなことを一切しなかった。衛兵隊でも生き残った者はベルグの別働隊の者だけで、ガゼの部隊の者はほぼ全滅している。ケイン達の剛勇を知る者はほとんど生還していない。

ケイン達が戦場にたどり着いたときには、魔術師達が創り出した霧はすでに晴れ始めていた。ケイン達は敵兵のひしめく戦場を、たった四人が一団となつて無人の野を行くが如く突つ切つて本陣までたどり着いたのである。迷宮探索を本職とした冒険者達の武勇をバルコスキーは認めていなかった。地上においては、正規軍の兵士たちに敵しえないと考えていたのだ。

ケインは瞬く間に数十名の兵士たちを切り倒した。フルプレート製の鎧もケインの剣技と名刀村正の前では意味をなさなかった。鋼で作られた重厚な鎧ごと、兵士たちの四肢は切り飛ばされていった。

ケインだけではなかった。室内にはもう一人、兵士たちと戦っている男がいた。ケインに村正を投げて横したのもこの男である。

『ベルグかつ!?!』

沈黙魔法『モンテイノ』の効果が消えていないケインは声に出して叫ぶことができなかった。今、ケインとともに戦っているのは、リルガミンの衛兵のベルグであった。だが、その剣技はケインの知るベルグのものではない。

かつて、ベルグはケインと共にニルダ寺院の地下迷宮の探索を行ったことがある。当時のベルグはうぬぼれが強く、膂力はあつたも

のの技術が伴ってなかった。ケインの強さを目の当たりにしたベルグは、勇気だけでも負けまいと、無謀な戦い方をしようになり、それが原因となって重症を負ったのである。

その後、ガゼの紹介によって、衛兵となったベルグは、ケインのような真の戦士を目指し、日々の研鑽を続けていた。

今、ケインの視界の隅で戦うベルグの剣技は、ニルダ寺院の時とは別物であった。膂力、敏捷性、技術が一体となり、完全武装の兵士たちを次々と屠っていった。ベルグにとっての生涯最高の技が振るわれていたのである。

だが、生涯最高の剣技は生涯最後の剣技であった。

最初にケインを狙った石弓の仕掛けは、今はケインには通用しない。防御魔法マゾピックの効果はまだ継続していた。だが、途中から戦闘に参加したベルグにはその効果は及んでいない。そして、石弓の仕掛けのことも知らず、ケインにはそれを知らせる方法がなかった。

壁の後ろ側に隠れている石弓の射手達は、マゾピックの影響下にないベルグを集中して狙った。息をあわせて同時に数十本のポルトが同時にベルグ目掛けて放たれた。

『ベルグっ！』

ケインの悲痛な叫びも音声化されることはなかった。

獅子奮迅の働きを見せていたベルグは忽ちハリネズミのような姿になる。だが、それでもベルグの動きは止まらなかった。身体中にポルトを体に打ち込まれたまま、変わらぬ動きで、兵士たちを切り続ける。

すでに死を覚悟していた。いや、むしろガゼが死んで以降、ベルグはずっと死に場所を求めていたのである。石弓のポルトのうち一本は、彼の右目を貫いていた。深く突き立ったそれは、脳にまで達していたかもしれない。

ベルグを狙ったのは石弓の仕掛けだけではなかった。ケインに対

してモンテイノを掛けた白魔法の使い手たちは、的を絞りにくい上に魔法の効きにくいケインではなく、ベルグを狙ってその動きを止めようとした。

「マニフォ！」

マニフォは敵一隊に麻痺を起こさせる呪文である。今、ケインとベルグの間には距離があるため、二人を同時にその影響範囲に治めることはできない。あえて彼らはベルグの方に集中してこの魔法を使った。

数十名の兵士に囲まれても、石弓のボルトを無数に打ち込まれても止まらなかつたベルグが動かなくなる。本来であれば、石弓が打ち込まれた時点で、ベルグは瀕死の状態であつた。凄まじいまでの精神力が意識をつなぎ、肉体を超えて働いていたに過ぎない。

戦士であるベルグには特別な防具でも使わない限り、麻痺魔法に抗する手段などない。マニフォによる麻痺は、彼の精神力が生命を維持することを許さなかつた。両手に剣を構えたままの姿勢で、ベルグはその場に崩れ落ちた。

「ベルグーッ！！」

ケインの喉から悲痛な叫びがほとばしつた。この瞬間、ケインに対するモンテイノが効果を失つたのである。通常ではありえないほどの短時間しか効果が持続しなかつた。魔力の暴発 強力な魔力を持つケインの呪文がモンテイノによって封じられているにも関わらず、ケインの怒りが魔力を体外に開放したのである。結果として、ケインに影響を及ぼしていた、モンテイノの魔力をも吹き飛ばした。一歩間違えれば、ケインの四肢は吹き飛びかねない事態である。制御力は未熟だが魔力の総量自体は大きい、若いエルフの魔術師見習いなどに修行中に起こる事故である。

ケインにこのような事が起こつたのは、怒りで我を失つたためだけでなく、魔術師なら生涯絶やすことのない、瞑想による精神修養をこのところ怠っていたがためである。ガゼの死以降、憂鬱で無気力な日々を過ごしていたケインは、魔法剣士として当然行うべき

ことすら出来ていなかったのであるが、それが功を奏した。

「ラダルトツ！！！」

ケインの魔法力の復活に気づいた魔術師達は、慌てて冷気の攻撃呪文を唱えた。ラダルトは魔術師系の高位呪文である。白魔法の使い手と同数、黒魔法の使い手が壁の後ろに潜んでいたのだ。

「テイルトウエイト」

あとから唱え始めたにも書かわからず、ほぼ同時に最高位の攻撃呪文を唱えたのはケインである。高速詠唱の使い手としては、バルコスキー配下の魔術師達はケインの足元にも及ばない。

十人掛かりのラダルトとケインのテイルトウエイトが室内で衝突する。空気中の分子の固有振動を低下させ、強烈な冷気を発生されるラダルトならともかく、爆炎呪文のテイルトウエイトは一步間違えれば、この城ごと爆発してしまうほどの力を持つ。事実、マツケンゼンの反乱の初戦では、野戦で半減したメイヤー軍が立てこもったアリエー二城をテイルトウエイト一発で消失させている。また、その後のエンジコート軍によるアインゼル城の攻城戦でも、高位魔術師のテイルトウエイトによる攻城作戦が実施され、反乱軍側が総力を持って阻止したということがある。

だが、十発分のラダルトが、どうにかぎりぎりテイルトウエイトの爆発エネルギーを吸収してみせた。ケイン自身も怒りに身を任せながら、無意識に威力をセーブしていた。魔力の暴発の直後のために、その反動で呪文の効力が低下していた可能性もあるかもしれない。冷気呪文と爆炎呪文の衝突は大量の水蒸気を室内に発生させた。

室内の話であつたので、水蒸気は部屋中に充満し、蒸し風呂のような状態になった。その隙を使って、動かないベルグに駆け寄った。

「ベルグっ！ベルグっ！大丈夫かっ？！」

大丈夫なはずはなかった。マニフォはそれほど高位の呪文ではないが、影響を受けた場合は、僧侶系の回復呪文を使わなければ回復することはない。すでに瀕死の状態だったのである。このままでは、そのまま出血多量で死ぬことは間違いない。

時間が経てば水蒸気は消える。視界がないうちに逃げなければならぬ。ケインは咄嗟に、ティルトウエイトに続けて高位魔法の高速詠唱を行った。

「マロールっ！」

転移魔法マロール。本来戦闘中の仕様は極めて危険である。座標が明確ではないし、目的地を明確にイメージできるかどうかも危うい。失敗して、地中や壁の中に転移してしまう確率も高くなる。だが、今回の場合はケインは明確な場所を初めからイメージできていた。現在地の座標の方は、いざという時のために、歩きながら正確に測っていたので、問題はなかった。

## 暗転

ケインはベルグを両腕で抱えたまま転移を行った。転移した先も暗い。これも分かっていったことだった。目の前には巨大な魔力を帯びた扉がある。ニルダ寺院の地下、現在のニルダ寺院はニルダの杖が一度失われた際に地下に飲み込まれた、かつての寺院の上に立てられている。ここは、その地下寺院の入口、過去、ベルグと共に降りていった迷宮への入り口である。

ニルダ寺院のような霊的なエネルギーの帯びた建物では、マロールによる転移でそこに実体化することを妨げる護符などが使われている。だが、地下のモンスターが地上に出てくることを防ぐこの扉の周辺に関しては、そうした護符の効果すら封印する強力な力場が発生している。迷宮への探索の都合のためにも、転移が可能となっていた。そもそも、この巨大な扉型護符のことを知っている人間自体がごく僅かである。

ケインはベルグを抱えたまま急いで、階段を上がった。地下への入り口の近くには寺院の修道僧達が行き来していた。突然現れたケインに驚いている。

「クレアっ！クレアはいないかつ！いやっ！誰でもいい。ベルグを・

「ベルグをすくってくれっ！」

「マディっ！」

幸いにもクレアは寺院にいた。というよりも、クレアはほとんど寺院の外に出ることはない。一日の殆どを本尊たるニルダの杖を祀る祈祷に当てていた。クレアはニルダの杖の効力を回復させるため、オーソンが示した二十年の月日の間、ニルダの巫女として人生を捧げることが誓っていた。

クレアは青い顔をしていた。美しい額に汗がにじみ出ている。

「大丈夫なのかつ？」

「だめです・・・傷が脳に達していますし、マニフォで四肢が弛緩している間に出血しすぎています・・・」

「傷はふさがったじゃないかつ！」

ケインにも分かっていた。マディはどんな状態からでも、健康な状態を回復させるが、それは本人に体力があつた場合に限られる。ベルグはすでに瀕死の状態であつた。

「カドルドを使います。一か八かですが・・・」

「クレア様・・・無理です。自分が一番分かっています」

ベルグは意識を回復していた。マディにより一時的に意識は戻っていたが、体には生命を維持できるだけの生命力が残っていない。

「あの時とは違います。俺の体はカドルドでももたない・・・」

ベルグはかつてニルダ寺院の地下迷宮探索の際にも、重症を負い、マディでは足りずカドルドで一か八かの回復を試みたことがある。だが、今回はそれも成功しそうにはなかつた。

「それよりも・・・ロストするぐらいな・・・話したいことがある・・・俺は・・・満足だ。あの時とは本当に違う。戦士として・・・満足している。ケイン・・・あんたには届かなかつたが、俺は・・・一流の戦士だつたる？」

「ああ。強かつた。見違えたよ・・・」

「それで……満足さ。戦士として満足して死ねるんだ……俺は幸せものだ……」

「ベルグ殿……」

クレアにとつてもベルグは戦友であった。だが、つきものが晴れたようなベルグの表情に何も言えなくなる。

「ケイン……あなたはそんなしけた顔してちゃいけないだよ……あなたにはいつまでも……戦士として立派な手本であつて欲しい……最後にあなたと共に戦えて……嬉しかったぜ……そんな顔したまんまでいたら……承知しねえから……な……」

「ベルグっ!!!」

ベルグは息を引き取った。二人の戦友、ケインとクレアに看取られてのことである。

「ケイン殿……」

クレアは驚いていた。あの、ケイン・ノーザンライトのあまりも弱々しい姿にである。

ベルグの死はクレアにとつても衝撃であった。

クレアはガゼとは血縁にあたる。王室とも血のつながりがある、クレセント家の当主がクレアであり、その傍系で伯爵位を得ていたのがガゼであった。

ガゼの死の後も、ベルグは度々ニルダ寺院を訪れていた。ガゼを失った悲しみを互いに思いやる関係であったのだ。

だが、そのクレア以上に、ベルグの死はケインを傷めつけた。

「クレア……俺は……ベルグを死に追いやった。不用意にバコルスキーの策謀にかかつて、こんなことに……」

うつむいたまま独り言のように呟いた。

「そんな、顔している時ではありませんぞっ！ノーザンライト侯爵」顔を上げるとそこにいたのは、この日、元々あう筈だったホワイ

トストーンであった。だが、それだけではない。後ろには二代目ポルダックとギルガメッシュまでがいた。

「長老・・・それに二人とも・・・なぜ・・・？」

長老は何も答えなかった。目の前に安置されたベルグの死体の側に近寄り、祈りを捧げる。

「ベルグは命を掛けて戦った。それが何のためであったか・・・」

「俺が・・・犬死させて・・・」

「馬鹿者っ！」

全員が驚いた。温厚な人格者であるホワイトストーンが怒鳴りつける姿など誰も見たことはなかった。

「ベルグの死を犬死とするか、名誉ある戦士としての死とするか、それはケイン・ノーザンライト次第じゃっ！自分を責めて何もせず楽をするなど許されると思うなっ！！」

苛烈な一言であった。

「・・・私に何ができると言うのですか・・・」

「ベルグ殿は・・・あなたを最高の戦士と讃え、憧れ、崇拜していた。彼の期待に答える戦士であなたはあるべきでしょう」

それに答えたのはクレアであった。ベルグの最後の言葉も聞いていた。

「自分を責めるのはやめなさい。ベルグは満足している。この・・・穏やかな顔を見なされ・・・」

ベルグはイカツイ男であった。だが、その死に顔は清らかでうっすらと笑すら浮かべているように見えた。満足して死んでいった者の顔である。

「ベルグの死をもって、ケイン・ノーザンライトの終りとするか、新たなあなたが始まりとするか、それを考えなさい」

何も言わないケインに、長老たちは隣室でケインが出てくるのを

待つことにする。部屋の空気は重苦しい。誰も何も口にしなかった。一時間ほどの間、ケインはベルグの遺体の側を離れなかった。長老の言葉は彼の甘えを許さないものだった。自分が甘えていたという認識はあった。その甘さがなければ、あの程度の危機はいくらでもぐり抜けることができたはずであった。ベルグを死に追いやったのは自分。ならば自分はどう生きるべきなのだろうか。

ふと、あることに気づいた。今日一の出来事を思い越したのである。先ほど現れた三人はすべて、ケインが訪ね、不在だった者達である。それがどうして今ニルダ寺院にいるのか。状況の不自然さに今更気づいたのは、やはり、ケインの気が抜けていたが故であろう。ケインは長老の手紙を取り出してみた。バルコスキーに対し、この書状を示したとき、彼は知らないと言っていた。バルコスキーはケインがリルガミンに到着し、城塞都市の中をぶらぶらと歩きまわっているところを発見して、急遽、稚拙な罫を張ったに過ぎないということだ。

長老の手紙はやはり、ニルダの杖奪還の際にケイン達を招集するためにあちこちにばらまいたものだ。薬を使って、古くなった羊皮紙を新しく見せている形跡がある。文字はそのままであり、紋章も正式なりルガミンの長老のものだ。だが、始めて奇妙な物に気づいた。宛名の横に帯状の模様が描かれている。いや、描かれているのではなく、何か輪状のものを転がしてその意匠を貼りつけたものだ。注意深く、その模様を観察して記憶と照らし合わせる。

「死の・・・指輪・・・」

記憶から同じ模様を呼び起こすまではずいぶんと時間がかかったあとでボルダックに確認すればはつきりするが間違いない。

死の指輪は呪われたアイテムである。身につけるだけで生命力を吸い取られ、いずれ必ず死に至らしめる。だが、それは強力な魔力が宿っているということであり、好事家にとっては、極めて価値のある指輪であった。

ケインは昔の事を思い出した。まだ、駆け出しの冒険者としてリルガミンにやってきた頃、リルガミン最強と呼ばれたカイエン教徒のパーティ、ヴァン・レイブンのパーティに参加していた頃、気づかないうちにこの指輪を身につけていたケインは、急激な体調不良に見舞われ、運悪く少しの因縁がある盗賊たちに追われる。

その状況からケインを救い、死の指輪を見つけて共に運んだのは・  
・。

急激にケインの頭脳が動き始めた。

『そうか・・・この手紙は二トロ・キッドが・・・』

バタンツ！とやや勢い良くケインは隣室のドアを開けた。幾分驚いた様子で、長老、ボルダック、ギルガメッシュ、それにクレアは幾分驚いた顔でケインを見た。

「長老と二人にお聞きしたい。今日はどこで何をしておられたのですか？」

「やっとそこに考えが向いたか。ケインっ！気づくのが遅すぎるな。まあ、それでも気づいたんなら、蜘蛛の巣が貼った頭も動き出したってことだ」

皮肉たっぷりに答えたのはギルガメッシュである。

「いつまでも気づかないんじゃないかとやきもきしたよ」  
ボルタックは明るい調子で答えた。

「それでは、わしから説明しましょう」

長老はゆっくりと今日の顛末を説明し始めた。

ホワイトストーン、ボルタック、ギルガメッシュの元には奇妙な手紙が届けられた。おそらく、それはベルグも同様であったはずである。手紙には、この日、ケインがバルコスキー伯爵に身柄を拘束されるであろうこと。そして、それを妨げてはいけないこと。リルガミンにやってきたケインとは顔を合わせないといった要請とともに

に、『ケインを蘇らせるために』との一言だけが書かれていた。

そんな面妖な手紙を信用して動いたのは、そこに、ニトロ・キッドの署名があつたからである。

「ニトロ・キッドが俺を担いで何かしようとしたのはわかる。だが、だつたらなぜ直接ここに現れないんだ？」

「それは私から説明させてもらいます」

「っ！？」

いつの間にか部屋の中に見知らぬ男が現れていた。スラっとした長身に、尖った耳、身体的特徴は明らかにエルフのものだが、服装は魔術師に多いローブのようなものではなく、動きやすい軽装であった。だが、その部屋には魔法で入ってきたとしか思われない。間違ひなく先程まではこの部屋にはいなかった。そして、ケインが入ってきて以降、あらゆる入り口から人が入ってきたことはない。

「我々がその書状を信じたのは、後から彼が現れて事情を説明したからだ」

ギルガメッシュがワインを口にしながらそう言った。

「ウィルス・サイトと申します。リルガミン盗賊組合の首領ローキの使いとして参りました」

「ローキー？」

「首領はかつての名前を捨て、盗賊組合の首領に代々受け継がれるこの名を名乗っております」

初耳である。だが、ケインはギルガメッシュの酒場で聞いた、ニトロ・キッドに関する情報を思い出した。

改めて、ウィルス・サイトと名乗ったエルフの若者を観察する。

盗賊組合と言われれば、たしかにこのエルフの格好は盗賊のものである。エルフの盗賊というのは極めて珍しいが、それだけではない。彼は間違ひなく、ドアや窓からこの部屋に入ってきたわけではない。

「マロールか？」

ウィルスはニヤリとした。すぐそこに気づくのは、ケインの判断力が回復してきたことを示している。

「私は見てのとおりエルフ。隠れ里で育ち魔術師としての修行をしておりましたが、素行が悪かったもので、里から追い出されたのです。あまり、魔術師という仕事も好きになれず、盗賊として気ままに生きたいと思ったものでして」

「なるほど。だが、高位魔法のマロールを扱え、それもかなりの使い手だ」

マロールは術者のレベルにより転移できる距離が変わる。迷宮の中では問題になることはないが、外で利用するとすると消耗はかなり激しい。それだけではない。マロールは魔力の放出により、次元の裂け目を発生させる。そのため、出現する場所にも空間の歪みが生じ、仮に目をつぶっていても、魔術に長ける者であれば、それに気づくことができる。

警戒していなかったとは言え、ケインにそれを気付かせなかったということは、ウィルスは気づかせないほどに空間の歪みをほとんど発生させずに転移してきてみせたのである。

「攻撃魔法が苦手で、ティルトウワイトは使えませんが。転移魔法は昔から得意でしたので」

昔から、という言葉を使うこと自体が彼の自信の表れであった。

マロールは高位の魔法であり、若くして使えるものは極めて少ない。「話はそれでしたが、我々盗賊組合は新たな首領ローキーを迎え、今回の工作を実施に移しました。目的はノーザンライト侯爵、あなたにそろそろ煮え切ってもらうためです。ローキーの言葉を借りるとですが」

ケインはすつと目を細めた。

「そのためにベルグが死んだと？」

「ベルグ殿の死は事故です。バルコスキーごときの段取りであれば、あそこまであなたを追い詰めることなど出来なかった。どうやら、バルコスキーには分不相応な協力者がいるようです」

その言葉でケインは納得したわけではない。だが目の前にいる男はただのメッセンジャーなのだ。

「しかし、あなたももうお気づきのはず。バルコスキー伯爵はあなたを恐れている。すでに、戦わずにいたることなど不可能。それともベルグ殿の死を本当に犬死となさいますか？彼の死に意味を与えるのはあなただ」

ケインはすぐにはその言葉に答えなかった。彼らが自分に何をさせようとしているかがわかったからである。

## 決別と復活

「ウインザーズ卿っ！これだけの人数をかけながらノーザンライト侯を取り逃がすとはどういうことかつ！？」

バルコスキーは震えていた。稚拙そのものの罨であったが、あと一步までケインを追い詰めた筈だったのだ。ガゼ亡き今、自分と対立する最も大きな政敵はケインであると彼は考えていた。中央の政治には関わらないという条件で侯爵位が授けられた経緯はあるが、軍事となるとそうはいかない。バルコスキーがあり得ると考えたのは、ケイン自身が反乱軍ではなく、討伐軍を起こして反乱を鎮圧してしまう可能性であった。

バルコスキーと言う人物は、少策士そのものという人物であるが、対立する者達の思考を自分に近づけて考えすぎるといふ悪癖もある。ケイン・ノーザンライトという人物のカリスマ性を恐れつつ、その立場や価値観を自分と同様に考えてしまうのだ。そのため、ケインが反乱軍をお越し、ラスティアの独立に動く可能性よりも、リルガミンの中で実権を握るために自分に対抗してくるといふ、ありえもしないことを恐れていた。

バルコスキーに叱責された人物は悪びれもせず、含みのある笑みを浮かべてそれに答えた。

「バルコスキー閣下。何があつたかは、あなたの方が間近にご覧になつたはず。ノーザンライト侯は刀一本で一瞬で数十名の兵士を斬り、十人分のモンテイノを短時間で無効化し、さらに十名掛かりのラダルトを高速詠唱のティルトウェイト一発でこの部屋に充満する霧に変えてしまった。その際にマロールで逃げたのです」

一目瞭然、当たり前前のことを口の端に笑を浮かべながら語ってみせる。男は長身で、きついウェーブのかかった長い黒髪と形の良い口ひげを持つ美丈夫であった。ライノ・ウインザーズ。マルグダ女王時代以来のリルガミン屈指の武門の出である。

ライノの祖先、レクト・ウィンザーズはダバルプスの反乱の際、最初は魔軍側に寝返った黒牙の騎士団に所属し、逃亡に成功したマルグダ王女一行の追跡の任を負っていた。その後、マルグダ王女のカリスマ性と、アラビク王子の技量に感銘を受けた彼は、一転してリルガミン王家側に寝返り、ダバルプス討滅後は、彼女の側近に転じたという経歴を持つ。

レクトがダバルプスを裏切るに際し、マルグダ王女側が示した条件は『一方の騎士団を統べる軍団長に任じること』であった。戦後はさらにダバルプスによって血統を絶たれたリフトハイム侯爵位を継承し、十二諸侯の一面をなしている。

ライノ自身は父親が健在であり、侯爵位を継承したわけではない。また、二人の兄がいることから、そもそも継承の候補者ではない。そのため、彼は軍属となり、その武勇によって出世を果たそうと考えたのである。変幻自在の処世術とシニカルなジョークのセンスは祖先を性格をもっともよく受け継いでいるのいかも知れない。

「なぜあんな事ができるっ！それにそなた自身は何をしていたっ！部下たちを虚しく死なせながら、魔術師たちの影に隠れて震えていたというのかっ！」

「部下を死なせたという意味では、閣下とも変わりありませんな。私は事前にお話したはずです。犠牲なしに倒せる相手ではないとね。どれぐらいの犠牲で相手と釣り合うのかは予想もついておりませんでしたが」

数十名の死人を出しながら、ケイン自身は転移魔法で逃げ延びてしまった。これ以上の犠牲をと言うのであれば、バルコスキーの首でも差し出さねば吊り合わないということだろうライノは考えていたが、さすがに口には出さなかった。

「そなたでもノーザンライト侯にはかなわないから隠れていたとでも言うつもりかっ！？」

「まあ、まともに殺り合つて敵うとは思ってないのは確かですがね。私が死んで、侯爵が生き残ってしまったら、戦場で彼と相まみえる人間がいなくなるではありませんか？」

ライノの言葉の意味をバルコスキーは正確に理解できたであろうか。ライノ・ウィンザーズは一戦士としてやりあえばケインに敵しえないが、戦場で指揮官同士として出逢えば互角以上に戦えると考えているのである。

「そんなことより、今はノーザンライト侯がこの後どう動くかを考えねばならないではありませんか？そんな必要がないというのであれば、私の仕事はもうありませんので、帰らせていただきたいのですが……」

そんなことを言う必要はないのであるが、ライノは極めて皮肉っぽい性格で、軍隊内でも上司に対していつも嫌味な口を聞いていた。武勇と機略に優れていなければそれだけで肅清の対象にされかねないことを平気でやってのけるような男であった。

「ラストティアに逃げ帰って大人しくしてくれるのであれば別にそれで良い」

「ラストティアに帰ったら、軍勢を引き連れてリルガミンに攻め上つてくる可能性の方が高いでしょうな」

「馬鹿なっ！」

「ノーザンライト侯の名声を以てすれば、すぐにも数万、場合によつては十数万単位の軍勢を集めることができるでしょうな」

「反乱を起こすというのかっ！」

「各地で独立戦争が始まつておりますからな。ノーザンライト侯がラストティア独立の軍をあげるといふ憶測はすいぶんと広まつております」

言外に知らないのはお前だけだという揶揄がこめられていたが、バルコスキーは気づいていなかった。

「が、今回の事があれば反乱でなくても軍を起こすことができます」「どついうことだ？」

「『君側の奸を排除する』と言う大義名分を得て、リルガミン王の臣下として軍を起こすことができるということです。今回のいきさつを公表すれば簡単なことですな」

ライノ自身も実際にケインがそのようなことをすると思っていない。ケイン・ノーザンライトという人物を直接知っているわけではないが、ラストティア出身ながらリルガミンを救うために剣を握り、しかも、侯爵位得てもまったく貴族らしくない、それまでの農園主としての生活を続けていることは有名であった。そのような権道を用いて栄達を計ることは考えにくい。

この鼻持ちならない小策士のうろたえる様を見るのは悪趣味ではあるが、多少は心地良かった。

「で、では、ラストティアに帰る前にどうにかするしかあるまいっ！探せっ！」

「ノーザンライト侯程のマロールの使い手に追いつけるような術者はなかなかおりませんな。まず無理でしょうが、やるだけやってみましょう」

そう言って、ライノは戦闘の現場となった部屋を後にした。

『ノーザンライト侯爵・・・まったくもって面白い男だ・・・機会があれば一対一でもお相手願いたいものだが・・・』

ライノ・ウィンザーズはリルガミン軍内部には珍しい侍型の戦士である。ウィンザーズ家でも、開祖のレクト以来の天才剣士であった。

その日のうちにライノはマロールを使える魔術師と探索呪文カンデイを使える僧侶をかき集め、ケインの探索に向かわせた。ただし、発見しても何もしないようにとの指示を密かに付け加えている。百名以上の兵士と魔術師を使っても勝てなかった相手だ。普通に考えて襲撃しても成功するはずもない。だから、その行動を明確に知るための処置であった。ライノはバコルスキーの言う事などまともに聞くきは毛頭ないのである。

現在のリルガミン王は聡明な人物である。しかし、その統治の前半は上帝を名乗り、実質的に国王以上の権威を得たトレボーに、トレボー失踪後は十二諸侯とトレボーの上帝府出身の官僚たちの対立が始まり、そのバランスを取る役割をはたすだけで精一杯となっていた。それがここに来て、トレボーほどにはできのよくないバコルスキーの台頭である。国王親政など考えられようもない状態であった。

地方での反乱により、マッケンゼンとバンセンノルムが事実上独立、コーンウエルでは鎮圧は一度成功したが新しい動きも出てきている。ガーランドも余談を許さない状態であった。最近では王は心労が祟つて、体調を崩すことが多かった。

国王を前にした朝議はだらだらと続いていた。賄賂と策略で宰相位を得たバルコスキーにはこの反乱を鎮めるだけの器量はなく、十二諸侯からは反感を買い、国内をまとめることすら出来ていない。結局は金に物を言わせて味方につけた者たちだけを使って、問題を解決しようとするのである。五ヶ国の反乱とカル・オ・カリオンの進軍、そのような国難を解決できるだけの器は持ち合わせていなかった。

朝議には、ライノ・ウインザーズも出席していた。彼は宰相直轄の親衛隊長の身分で、バルコスキーの後ろに直立している。バルコスキーは大規模な私兵を持ってはいない。権力を得てから、正規軍の一部を再編して親衛隊を組織したのである。バルコスキーの権力を強めたカル・オ・カリオン軍掃討戦の際、大枚をはたいてライノを味方に付け、大きな戦果を上げたのだが、その後、小飼とするために自分の親衛隊長に登用したのである。

十二諸侯の中で反バルコスキーの急先鋒はマクナマラ侯爵である。

彼は必ずしもガゼに協力的ではなかったのだが、リルガミンを守るためにエンジコートとメイヤーを呼び戻すことを主張したことがあった。その男の後ろに控えた人物がライノに対し、殺気を帯びた視線を送っている。

ブライアント・イーノ伯爵。ライノ同様軍属で、一時は騎士団長を務めたことのある家柄の男である。イーノ男爵家もマルグダ時代にダバルプスの反乱で功績を上げた家柄である。だが、ウインザーズ家とは浅からぬ因縁があった。ブライアントの祖先オブライエン・イーノはダバルプスの反乱の際、まだ王家側に寝返る前のレクト・ウインザーズに殺害されている。

ダバルプスの反乱から百年近く立っているが、その恨みは未だに消えていない。元々騎士階級の家柄でしかなかった、ウインザーズ家は裏切りの報奨として侯爵位を得ているが、殉死したオブライエン・イーノの子孫は伯爵位を受けただけである。また、ブライアントには個人的にライノに対する恨みもあった。

ライノはブライアントの視線に気づいてはいたが、いつものことなので、気にしないふりをしていた。恨みがあると言って、いきなり切りかかってくるような相手でもないからである。

議論はただらだと続くだけであった。議題はニルダの杖を失い、西方二カ国の独立を許したりルガミンの国防計画の策定なのだが、バコルスキーがまくしたてる非現実的な計画に、十二諸侯は閉口していた。反対をしたところで、ほとんど意味はなさない。宰相という地位を得てしまったバコルスキーに反対したところで、あとから卑劣な報復を受けるだけなのだ。

マクナマラが渋面をし、ライノがこっそりとあくびを仕掛けた時、関係者しか立ち入ることの出来ない会議室に数名の人物が入ってきた。

一人はチェインメイルを纏い、フルヘルムを被っているので顔は

わからない。腰に東方式の剣を下げていた。その後方には、エフル族と思しき魔術師風の服装をした女が二人。その二人は絶えず呪文を唱え、複雑な様式で手を動かし続けていた。何らかの魔法を使っているように思われるが、高名な魔術師を含む会議場の中で、その意味を理解する者はいない。

「何者かつ！なぜこの部屋に入ってきたつ！ここは親政なる王国の朝議が行われているつ！権限なくして立ち入ることは許さぬぞつ！」  
大声で喚いたのはバルコスキーである。が、男は彼の方を見向きもしなかった。ライノだけは気付いている。自分が搜索部隊を発して探しているケイン・ノーザンライトその人である。

国王の前に歩み出てきたケインは、そこに膝まずき、兜を脱いだ。朝議に参加していた貴族たちの口から驚きの声が漏れる。

バルコスキーは魚のように口をパクパクとさせて、何も言えなかった。先日の策謀はどんなに稚拙であっても、一応の証拠を揃えて入る。抗議してきたところで、『反乱の疑いが掛かったものを拘束しようとしたところ、抵抗にあつた』と言うことは間違いない。『反乱の疑い』のための証拠は彼が用意した怪文書しかないが、噂としては各所から出ている話ではある。

バルコスキーが何も言えなくなったのは、ケインが武装してそこに現れたからである。先日の戦いを考えれば、自分やリルガミン王を殺害することもケインには可能であるように思われた。魔術師が唱えている呪文は攻撃魔法かもしれない。

ケインは跪いた姿勢のまま、リルガミン王に向かって話し始めた。「陛下よりラスティア侯爵の地位を賜わいしケイン・ノーザンライト。お耳に入れたし重大な事柄あり、非礼ながら罷りでてまいりました」

バルコスキーは青ざめた。事の正当性など関係ない。ここで、先日のバルコスキーのしたことを言い立て、同時に自分が斬られてし

まあ、話はそこで終わりである。バルコスキーが自分を正当化することなどできなくなるのだ。

「ノーザンライト卿、緊急にということであれば、突然の来訪については、その否は問わぬ。して、重大な事柄とは何か？」

リルガミン王はうるたえてはいない。ケインの人柄を知っていた。庶民と親しみ、貴族らしからぬ所業の多い人物ではあるが、理知的で道理に違わぬ人物であると確信している。

「このケイン・ノーザンライト、陛下より賜った、ラスティア侯爵の爵位と、リルガミンの騎士、ダイヤモンドの騎士の称号を返上いたします」

「何っ？」

その場にいた誰もがケインの言葉を理解できなかった。

「ノーザンライト卿・・・何故か？」

そう言った瞬間、二人の魔術師、シルヴィ・プリスとルミエラが呪文の声を高めて、印を結んだ。

『このリルガミンは、すでにニルダの寵愛を失いました』

その声は聴覚によってでなく、直接意識に語りかけられてきた。二人の魔術師の使っている術の正体がこれである。エルフ族に伝わるの幻術の応用であった。幻術は視覚のみでなく聴覚にも作用することができる。

『リルガミンの街はその魔法都市としての力ゆえに、あまたの戦乱に巻き込まれてきました。リルガミンには力がなくてはなりません。それ故、ニルダはニルダの杖をここに与えましたが、それだけでは不足でした。知恵と、勇気と、力を持った者、勇者があつてこそニルダの杖は輝く。私自身がニルダの杖を持ち帰る際に、ニルダ自身から語られた言葉です』

「その知恵と勇気と力を示したのはダイヤモンドの騎士であるあなたであった」

リルガミン王は静かに言った。

『しかし、ニルダの杖はその力を失いました。その今こそ、再びリ

ルガミンの民は知恵と勇気と力を示さねばならない。にもかかわらず王宮は腐敗し、この魔法都市を守ることも、己の保身を考え、稚拙な策略で足を引っ張り合うだけです。ルガミンはすでにニルダの寵愛に値せず、ダイヤモンドの騎士はその役目を果たすことはできません。』

「して、ラスティア侯爵位とルガミンの騎士の称号を返上されたという理由は？」

『無位無官となり、本来の私の名を名乗ってその指名を果たしたいと存じます。』

「本来の名？」

ケインは声を高めて答えた。

『ラスティア侯爵、ケイン・ノーザンライトは、ルガミンより与えられり爵位と称号を返上すると共に、ノーザンライトの姓を捨てる！』

ケインは三つのメダルを空中に放った。一つはラスティア侯爵の印章、残り二つはルガミンの騎士とダイヤモンドの騎士の称号と共に送られた紋章である。それが地面に落ちる直前。抜き打ちにされた村正によって、三つのメダルは全てまっふたつに割れる。

『本日より、私はラスティア騎士団長アーウィン・セイバーフロストが一子！ケイン・セイバーフロストとして、この剣を振るう！ルガミン王とその臣下、そして市民達よっ！ダイヤモンドの騎士、ケイン・ノーザンライトはいないっ！知恵と、勇気と、力を自ら示せっ！それができぬとあらば、魔道都市ルガミンはラスティア軍によって滅ぼされることを覚悟せよっ！』

会場中に戦慄が走った。いや、貴族たちは誰もまだ知らないが、ケインの言葉は城塞都市にいる全ての人々に届けられていたのだ。シルヴィとルミエラの呪文はケインの言葉を二万のルガミン市民全てに向けて届けられていたのである。

「きよ、狂人めっ！ノーザンライト侯は正気を失っているっ！陛下

をお守りしてこの男を斬れっ！」

半狂乱のバルコスキーが叫んだ。その言葉に反応できたのは二人しかいなかった。

ライノとブライアントである。二人は跳躍し同時にケインに斬りかかった。

二人の刃がケインに届く直前、高速詠唱法による転移魔法のキーワードがシルヴィの口から唱えられた。

「マロール」

二人の剣はゆかを叩き、ケインだけでなく二人の魔術師の姿もそこにはなかった。その場にはいないケインの声が再び意識に直接語りかけてきた。

『リルガミンよ。ニルダの寵愛に値する資格を示せっ！』

貴族たちは呆然としたまま身動きができなかった。ほとんどの者はケインの言葉の意味を半分も理解していない。

「ケイン・ノーザンライトがアーウィン・セイバーフロスト卿の息子だと・・・？」

ほそり、と口にしたのはライノである。

「ニルダの寵愛に値する資格を示せ・・・か・・・」

ブライアントも誰に向かってでもなく独り言のように呟いた。

その後、リルガミンの全市民に起こった怪現象の報告が入ってきた。このことにより、急速にバルコスキーの権力基盤が音を立てて崩れ始める。リルガミンの市民と貴族、そしてリルガミン王はケインの言葉によって、目覚めた。トレボー時代を経て、自らの力で城塞都市を守る意志が失われていたリルガミンが、その復活の狼煙を上げたのはこの一月後の話であった。

## 賢人議会

ラスティアは元々従来北方の貧しい農業国でしかなかった。リルガミンのような魔道の中心地でもなく、コーウエルのような豊かな水産資源や農耕地を持つ産業国でもなかった。

三十年前、上帝を称する前のトレボーがラスティアを攻めたのは、西方二カ国に進むための通り道を確保するために過ぎない。そもそもその時点でのラスティアは占領する価値もない状態にあった。

ラスティア王国の首都は古来都市国家であったファスティア市であった。歴史自体はリルガミンと同様に古い。しかし、ラスティアは建国当初から百数十年に一度の割合で起こる災害によってその発展を常に阻害されていた。

竜害である。多くのドラゴン族はその戦闘力とは裏腹に温厚な性格を持っている場合がほとんどである。だが、例外が存在する。山間部に群れをなして生息していると言われる飛竜、ワイバーンに限っては、獰猛で残虐な性格を持ち、度々、人間を襲うことがあった。魔力を用いて地下迷宮などで放し飼いにされていたり、ドラゴンライダーによって飼育されている場合を除き、野生のワイバーンの生態については詳しいことは分かっていない。

ただ、ラスティアでは百数十年に一度、そのワイバーンが群れをなして村々を襲うのである。その原因は分かっていない。ワイバーンたちが生息する北部ウエル山脈の気候変動であるとか、やはり百数十年に一度の割合で発生する、自然魔力の異常発動が原因であるという仮説はあるが、未だ謎に包まれている。

三十年前、トレボーがガーランドを滅ぼすのに先立つこと三ヶ月、ラスティアでは竜害が発生した。それも、史上かつてない規模で。さらに、発生した場所が悪かった。ワインバーンの群れの通り道に

は、王都ファスティアがあつたのである。

飛竜の恐怖は身分別け隔てなく王都に住む者たちを襲つた。トレボーがラスティア進軍を決める前の時点で、すでに王家の血族の大部分を失つていたのである。

中心地である王都が壊滅し、それ以外の地域でもワイバーンの群れによつて多くの村が壊滅していた。そこにリルガミン軍が進軍してくる。トレボーは壊滅的な被害を受けた地域を避け、冬に向けて多くの食料を備蓄している村々を略奪しながら進軍した。

まともに占領統治などするつもりもない国への進軍である。リルガミン軍は略奪によつて補給を行い、通り道にあつた村は全て壊滅していった。

そんな折、僅かな軍勢を率いて、リルガミン軍と戦つたのが、群盗討伐のために地方に赴任していたために難を逃れたラスティア騎士団長アーウィン・セイバーフロストである。

ラスティア騎士団は元々騎士団という呼称が不釣合なほどの小規模な軍勢でしかなかった。アーウィンはその僅かな兵力を率いて、一発逆転を狙い、進軍中のトレボーの本隊を強襲したのである。五百名程度の本隊に後陣を襲わせ、その対応をしている際に僅か十名程度の部下でトレボー自身がいる本隊に乗り込んだのである。

結果としてトレボーは命を拾つた。側近としていた使えていた宮廷魔術師ワードナが自軍の被害を覚悟の上でティルトウエイトを唱えなければ、後の上帝トレボーは誕生せず、歴史は変わつていたことであろう。

しかし、そのためにトレボーは幕僚の半数を失い、ラスティアを経由して進軍するはずだったバンセンノルムの攻略を後回しにせざるを得なくなつたのである。

戦後、トレボーはアーウィンの血族を根絶やしにした。だが、王都は竜害によつて壊滅し、政治や軍事に関わる書類もほとんど失わ

れていたために、セイバーフロスト家の詳細を知ることができず、幼い彼の息子ケインの存在は十数年後まで発覚しなかったのである。

リルガミン宮廷では、一枚の秘密文書が見つかり、議論の遡り上がった。書類には”N・W・”と言うイニシャルの署名がある。十五年前、健在であった上帝トレボーへの密偵からの報告書である。

これには、当時ワードナが籠っていた地下迷宮、狂王の試練場に挑む冒険者たちの中で、迷宮を攻略する可能性のあるパーティについて調べ上げた結果が記されていた。問題のページには、実際にこの迷宮を攻略し、アミュレットを持ち帰ったケイン・ノーザンライトについての記載がされている。

「ラストティア出身。二十歳。人間。男。戦士。リシヨウと名乗る老人より東方世界の武術の伝授を受ける。本名ケイン・セイバーフロスト。ノーザンライトは北方系の母方の姓。父はアーウィン・セイバーフロスト。迷宮探索の目的はワードナからアミュレットを奪い、上帝陛下への復讐を……」

トレボー失踪後、上帝府にいた官僚達はトレボーが隠匿していた資料を見つけたしその内容を調査していたが、すでにワードナが討伐されていたため、試練場に関連する資料は調査の対象とはならなかった。バルコスキーの指示により、急ぎ、ケイン・ノーザンライトに関する資料を探した中で出てきたものである。

「本当だったのか……ケイン・ノーザンライトが、アーウィン・セイバーフロストの息子だったとは……」

そう呟いたのはマクナマラ侯爵で、バルコスキーは写し書きされた資料がくしゃくしゃになるほど強く握ってガクガクと震えていた。「ラストティアでの反乱の可能性については、たしかにノーザンライト侯爵が実質的な指導者になることは考えられた。しかし、ラストティア王家は血族が全滅しており、反乱の旗頭になれる象徴的な人物

がないいたため、小規模なものに収まるはずというのがこれまでの観測だったのですが……」

これはライノの父であるウィンザーズ侯爵の言葉である。

まさか、その実質的指導者となるケイン自身が、反リルガミンの旗頭となりうる血族の出身だとは誰も思っていなかったのである。

ケインの全身は東方世界の武術を身につけた冒険者。それが大方の認識だったのだ。

「彼は我々に向かって宣言した。知恵と勇気と力を示さねばラステイア軍がリルガミンを滅ぼすと……」

マクナマラはやはり誰に向かってでもなく独り言のように呟いた。

「しかし、奇妙ですな……」

そう呟いたのは、リルガミン歴代の武門の家柄で新たに近衛騎士団長に指名されたジュリオ・アーミテツジである。元々エンジコート將軍の配下にあつた男であるが、マツケンゼン駐留軍の帰還が指示される数カ月前の配置転換でリルガミンに帰還していた為に、マツケンゼン討伐軍には参加していなかった。

傭兵には定評があり、また、バルコスキーにも、どの十二諸侯の派閥にも属さない中立的な人物であつたため、リルガミン王自らの指名により近衛騎士団長に任じられていた。

「奇妙とは？」

マクナマラの問いに、一瞬間を置いて答える。

「ノーザンライト侯、ああ、爵位は返上されましたが便宜上こう呼ばせていただきますが……とにかく彼がラステイアで独立軍を立ち上げ、リルガミンまで攻めこむ気であるなら、先日のようなパフオーマンズはまったく不要です。あの演説はリルガミン市民にはなく、ラステイアの民衆に対してこそ行すべきもの。さらに言えば、ラステイア侯爵の地位を維持したままであれば、腐敗した宮廷を一掃するという名目で軍をあげ、反乱軍としてでなくリルガミン王の臣下の解放軍として進軍してくることができます。大義名分と彼の名声があれば、リルガミン市民が呼応して城砦都市内で反乱を起こ

すことすら期待できる・・・」

それは、先日ライノ・ウインザーズが戯れにバルコスキーに披露してみせた推測であった。ケイン・ノーザンライトはリルガミンの民衆にとつては生きる英雄伝説である。狂王と呼ばれ恐れられたトレボーを結果的に失脚させ、ニルダの杖を奪還し、進軍してきたカール・オ・カリオン軍の指揮官を戦場で倒した伝説の戦士。侯爵位を得ても市民たちと共に酒を酌み交わし、堅苦しいところのない親しみやすい人柄。バルコスキーが権力を掌握して以降、民衆の指示を失った宮廷の貴族たちとは、比べ物にならないほどカリスマ性を持つていた。

「それについては、私から説明させていただきたいのですがいかがですか？」

議場の入り口に立つ老人が不意に声を上げた。本来、この席上には十二諸侯と閣僚級の文武の幹部しか入室は許されない。

「ホワイトストーン殿。長老といえどこの部屋への入室は許されていないはず」

目くじらを立てたのはバルコスキーである。リルガミンの民主を代表するこの老人は、バルコスキーにとつてはもつとも煙たい人物であり、国王への謁見や宮廷への参台を極力させないように、様々な手を打っていた。

「私が入室を許可した。あの言葉を聞いた市民たちの反応を知るために。必要なことだと思われませんが。いかがですか？閣下」

微小を浮かべてそう言ったのはマクナマラと並ぶ十二諸侯の一人、エンリケ侯爵であった。エンリケはダパルプスの反乱以前から続く名跡を誇る唯一の十二諸侯である。マルグダのリルガミン王家軍の中核をなした、紫翼・白鱗騎士団を統括した名将の家柄である。

ホワイトストーンはバルコスキーが答えるのを待たず話し始めた。「ケイン殿は事件の前日にリルガミンを尋ねられた。昔なじみの酒場で、彼特有の趣向でしような、試練場時代から多くの時を過ごし

たギルガメツシユの酒場で一般市民と盃を交わしていたところを、王宮の兵士に囲まれ、連れて行かれたと店にいた者が言っております」

「どういうことですか？」

丁寧な口調で質問したのはマクナマラである。十二諸侯といえど、この老人には尊敬の念を持っている。身分の差などは問題ではなかった。

「宰相閣下の命令であると兵士たちは口にしたそうです。反乱を起こすための密談のためにその酒場に来てしていると決め付けられたそう」

「バルコスキー閣下っ！それは本当ですか？」

マクナマラは怒りの感情を隠さない。事前にケインがリルガミンと決別する意志を固めていたことを知っていたのなら、対処法はいくらでもあつたはずである。

「マクナマラ侯爵。まだお話は終わっておりませぬ。ケイン殿はその時点ではあのようなことを行う意志は固めておらなんだ。リルガミンへは私からの招待状を見てやってきたのです。ただし、私はそのような手紙をだした覚えもありませんがの」

話が奇妙な方向に進み始めた。不可解な話ばかりである。

「さて、ケイン殿はバルコスキー伯爵と相見え、自己を弁護されたが聞き入れられず、あまつさえに武装した兵士に取り囲まれたためにやむなく応戦し、逃亡されました。逃げ込んだのはゆかりの深いニルダ寺院。私はそこで何名かの彼の友人たちと共に、ケイン殿に会っております」

バルコスキーの稚拙な策略が暴露されたが、十二諸侯や他の重臣たちはそのことを気に留めてもいない。バルコスキーがそういう人物であることは誰もが知っていた。だが、それはきつかけですらないということが、ここまでの話からでも理解できたのである。

「ケイン殿は大きな衝撃を受けておられた。自分はリルガミンのために剣を振るってきたにも関わらず、そのような仕打ちを受けたの

です。ケイン殿は噂の通り、トレボー帝を憎んではおられませんが、この城塞都市には深い愛着をお持ちでした。同時にあの時、本人の口から語られたように、ニルダの言葉を彼は直接聞いています。リルガミンの民は自らが知恵と勇気と力を示さねばならないと……

全員が静かに長老の声を聞き入っていた。

「ニルダの杖が効力を失ったということは、精霊神ニルダはその役割を終えたことを意味する。ニルダはリルガミンの民に自ら魔法都市を守る意志があるかを問い続け、そして見限られたのだとケイン殿は申された。しかし、ニルダから認められたダイヤモンドの騎士である自分はまだ諦めてないとも仰った。ニルダに代わり、ケイン殿自身がリルガミンの民に問いたいと」

「つまり……ノーザンライト候は我々を試していると……」

「その通りです。私と友人たちはその決意を聞いただけ、その意味するところまでは聞き出せなんだ。彼の腹心と思しき人物が事件の時に従っていた二名のエルフを伴って現れた後、マロールを使ってどこかに行ってしまったのでな」

しばしの沈黙が訪れた。ケイン・ノーザンライトは本気であることがわかる。一方で、それはリルガミンという城塞都市を愛するがゆえのことであつた。自分たちは果たしてこれほどまでにリルガミンのことを思っていたのか、重臣たちは皆が衝撃を受けていた。

「しかし……前の晩に決意した割には、周到な計画があつたとは思われない見事な仕掛けでしたが……」

アーミテツジの疑問は確かである。付き添っていた二名の魔術師はかなりの腕前ではあつただろう。だが、逃亡の際のマロールのタイミングや、二万の市民全てにケインの言葉を伝える大規模な魔法などは、その場の思いつきで出来るようなものではない。

「恐らくですが、ケイン殿が知らないところで彼の部下たちが密かに準備をしていたのではありますまいか？ そのところは私にもわかりませぬが」

長老ホワイトストーンの言葉はやや砕けてきた。余裕をもった笑で顔面蒼白のバルコスキーを見やる。

「だからどうしたと言つのかっ！彼が無礼にも我々を試しているつもりであるうとなかるうと、軍勢をかき集めてここへ進軍してこようとしていることは間違いないっ！考えるべきは彼がどういうつもりであるかなどではなく、どうやってあの無礼者を倒すかではないのかっ！」

突然、バルコスキーは激発した。精神的に不安定な状態に陥っているのではないかと思われた。だが、たとえそうであろうとも、彼には宰相としての権限があり、それを使って、都合の悪い人物を失脚させることに長けた策士であることにはかわりない。この場では誰も下手なことは言えなかった。

「たしかにそうでしょうが、と言つても、今の話からすればノーザンライト候もラスティアでは何も準備はしてまずまい。拳兵にはそれほど時間がかからなくとも、進軍してくるまでは今しばらくの余裕はある。その間に体制を立て直す必要がありますな。が、今日はこれぐらいにして、各々落ち着いて今回の事件のことを考える事としましょう。あまりにも事が多すぎて、頭が混乱してきましたからな」

エンリケの言葉に重臣たちは頷く。バルコスキーも従うしかなかった。自分の精神が不安定になっていることを自覚しているからである。過去、なんども不用意な発言で失敗してきているのだ。

「さて、バルコスキーのあの様子、彼は長くは持ちますまい。ケイン・セイバーフロストの意図はともかくとして、我々はリルガミンを再興するための動きを始めねばならない」

ホワイトストーンが証言した会議と同じ日の深夜、エンリケ侯爵の屋敷に十二諸侯が集まっていた。屋敷の主の言葉に全員が頷く。

「だが、現実にバルコスキーが全軍の指揮権を握っているし、仮に彼が失脚したとしても、他の上帝府出身の者がしゃしゃり出てくることも間違いありません。」

トレボーが失踪して以降のリルガミン中枢では、上帝府出身の専門知識を持つ貴族官僚達と、伝統的な十二諸侯を中心とする高級貴族たちとの勢力争いが激化していた。

元々リルガミンは王家と十二諸侯によって統治されていたのであるが、トレボー時代を経て全てが変わってしまった。トレボーは意表を付いた政治手法を駆使して瞬く間に実権を握ったが、その後は、十二諸侯に対抗するため、身分の低い者達も含めて有能な人物を集めて上帝府を立ち上げた。

非主流派ではあるが、軍事や政治の専門家を集めて作られた上帝府にたいし、伝統にあぐらを書いて、日々の研鑽を怠っていた十二諸侯が彼らに対抗出来るはずもなく、名跡と王家との関係に頼って嫌味をいう程度のことしか出来ていないのである。すでに家柄だけで政治を行えるような時代ではなくなっていた。

「歯がゆいことではあるが、我々では無理だ。バルコスキーに取って代わることなど到底出来ん。ましてや、この国難に対して采配を振るうことなど・・・」

悔しそうにマクナマラは言う。マクナマラ自身は十二諸侯の中では軍事と政治に明るい方であるが、それであっても、上帝府の専門家達に比して圧倒的に力不足を感じていた。彼の発言によって十二諸侯は自身が実権を握ることなどできないことを自覚したのである。「だとするならば・・・我々ではなく、我々が取り立てた能力のある人物、賢人がこの国を取り仕切るようにするのがよいのではありませんか？」

ウインザーズ侯爵は元々考えていたことを口にした。実を言えば初めからエンリケとマクナマラの三人で打ち合わせた演技なのである。他の九人の侯爵を納得させるための工作であった。

「賢人？」

「そうです。我々が一人ずつ、軍事や政治に明るい人物を推薦し、その十二名を持って国家を差配する機関を作りましょう。名づけて賢人議会。東方の隣国ロラではかつて、民衆の支持した人物を集めて議会を模様し、政策を決めていたとか。それに習い、民衆ではなく我々の支持した人物によって国を動かせばよい。賢人は我々が認めれば家柄や身分に区別なく能力によって選ばれる。これは民衆の支持を得るにも都合が良い」

「なるほど、今は各地で反乱が起きる戦乱の時代。賢人の半数は軍事の関係者として、残りを政治に明るい者にするのがよいでしょうな」

この議論は拍子抜けするほど簡単に結論がでた。元々、十三諸侯の中でもまともに政治について考えているのは先の三人だけであった。残り九人は十二諸侯としての義務から、体裁を取り繕うためにこの場にいるに過ぎなかった。

数日後には賢人議会のメンバーが確定し、リルガミン王に奏上された。その名目は『国難に際して宰相を助ける諮問機関を設ける』というものであったため、バルコスキーも強硬に反対するわけにはいかなかったのだ。反対するなら何らかの代案を出さねばならない。バルコスキーも余裕がなくなっていた。民衆はまったく彼に支持も期待も寄せておらず、各部署ではサボタージユが目立ち始めていた。

リルガミン初の賢人議会のメンバーは以下の通りである。(カッ  
コの中は推薦人を示す)

- ・ ホワイトストーン (パスツール侯爵)
- ・ ジュリオ・アーミテッジ (エンリケ侯爵)
- ・ ブライアント・イーノ (マクナマラ侯爵)
- ・ ライノ・ウインザーズ (ウインザーズ侯爵)
- ・ ガイエル・ギルブレース (シエラトン侯爵)

- ・ラザール・ボレロ（レンドルフ侯爵）
- ・ハインツ・ボルダック（ボーモン侯爵）
- ・バーバル・レント（バーラ侯爵）
- ・タッグ・ウォリス（サントナ侯爵）
- ・リーガル・ロダー（シナトラ侯爵）
- ・ガイエス・ロダー（コリンウッド侯爵）
- ・バン・ロイレ（ガリア侯爵）

半分は軍事と軍政の担当者であり、残りが文官である。エンリケの目論見は、賢人議会が次第に力を付けつつ、民衆と国王の支持を得て、実質的には彼らが国政を掌握することにある。推薦人である十二諸侯にとつて都合の悪いことがなければ、あとは優秀な彼らに全て任せておけば良いと考えたのである。

その考えが甘いことに気づくには、もうしばらくの月日が必要であった。

## リルガミンの再生

ケイン・ノーザンライトの『離反宣言』から一月が経過した。この僅かな期間でリルガミンを統治する新たな体制を構築できたのは、ケインの発言に触発された人々の力によってであろう。

『触発された人々』と言うのは十二諸侯のことを指すわけではない。彼らは自己の保身を測っただけであった。精神不安の独裁者、バルコスキーに対抗する方策として、賢人議會を創りだしたに過ぎない。だが、結果として、身分に関わらず能力のある者を推薦したことで、リルガミンの新体制を作る道筋をつけたのである。

十二諸侯の思惑は、実務家の集団である賢人議會がバルコスキーら上帝府派を凌駕し、国家の運営を引き受けた上で、推薦人である自分たちの都合の良いように動いてくれることであった。しかし、それは良家のおぼっちゃん達の甘い夢想と言うものであったろう。その『自分たちより頭がよい』と見込んで推薦した者たちが、自分たちを出し抜くということ想定していなかったのである。

『賢人議會』の初会合が開かれた。それぞれバラバラに推薦された議員達は、お互いの顔すら知らない者も多い。初会議は顔見せを兼ねたものであった。

議長を務めることになったのは、議員の中で最年長、リルガミンの長老の称号を持つホワイトストーンである。ある意味では賢人議員の中で最も目玉人事であったのは彼であろう。トレボー時代やそれ以前でさえ、リルガミンの長老は『城塞都市の相談役』でしかなく、直接国政に参加することなどなかったのだから。

今一人、さらに異色を放つ人物がいる。ハインツ・ボルタック。リルガミン一の総合商社『ボルダック商会』の会長を務める人物である。まだ若い。父親は『ボルダック商店』を開業し、一代のうちリルガミン一の商人に成り上がった人物である。その父親、先代

ボルタツクは今、エフリスと名を変え、ケインと共にリルガミンの敵となっている。

ホワイトストーンとボルタツクの二人は、敵であるケインとの関係の深い人物である。それにも関わらず、賢人議会のメンバーに加えられたのは、長老の人望やボルタツクの商才、情報収集能力を重視しただけでなく、市民感情に配慮してのことであった。

今現在の状況であれば、ケインを百パーセントの悪者にして『憎らしい敵』として打つことは難しい。リルガミンに試練を与えるニルダの代理、ダイヤモンドの騎士である彼の試練に挑む、そういう認識に持つていく必要があった。そのため、あえてこの二人をメンバーに加え、特にホワイトストーンにはこのことを喧伝してもらう必要があったのである。

もう一人、彼ら二人とは違った意味で物議を醸し出した人事があった。宰相親衛隊長ライノ・ウインザーズである。まず、彼は十二諸侯ウインザーズ家に連なる人物で、家督を次ぐことはないとは言え、高級貴族である。さらに、現職はある意味では当面の敵であるバルコスキーの腹心なのだ。

彼を推薦した父親はこう言った。

「ライノは我が息子ながら武勇と機知に富んだ男であるが、忠誠心とは無縁の男。バルコスキーに使えたのも条件が良かったからだろうし、ちゃんと好条件さえ提示すれば喜んで参加するだろう。議会に対して忠誠なんてものは必要なかろう？」

反発もあつたものの、結局ライノ・ウインザーズは賢人議会に席を得ることとなる。それは、彼に個人的な憎悪を寄せるブライアント・イーノの神経を逆撫でにしたが、規律と組織を重視する若者は表面上は私怨を捨てて彼を同僚と認めることにしていた。

全員の自己紹介が終わったところで、ホワイトストーンが本題に入る。

「さて、我々の存在意義というのは、特にラスティアやガーランドの反乱に備え、ひいてはリルガミンの復興を図ることにある。ノーザンライト侯の言葉をあえて借りるなら、リルガミンの民として、知恵と勇気と力を示すということじゃ。さて、この城塞都市が持つ当面の問題をお歴々はなんとお考えじゃろうか？」

「賄賂と小賢しい策略で押し上がったバルコスキー伯爵の如き人物が、国政の実態を握っていることでしょう」

勢い良く答えたのは、バーバル・レントであった。俊才の呼び声高い若手の文官である。バルコスキーら上帝府出身の者達はトレボ―時代に取り立てられた人物やその師弟がほとんどである。バーバル・レントは元々十二諸侯バーラ侯爵の遠縁に当たる人物で、彼の父親はトレボ―に使っていたものの、上帝失踪後は上帝府派に疎まれ失脚。息子の方は地方の小役人から始めて、そこで才覚を示したため、本家であるバーラ侯爵の推薦で議会メンバーに加わる事となったのである。

レントは潔癖症で、一切の不正を許さないという評判のある人物である。一方で思考の柔軟性に欠ける面があるとの指摘もあった。高い行政力を活かしながら、融通の聞かない点は周りが補っていく必要がある。

「ノーザンライト侯はその行動の理由に上げておられたっ！ 宮廷が腐敗しているっ！」

「では、宮廷の腐敗がなければリルガミンは危機に陥らなかつたっ？」

やや皮肉げな声で問いを発したのはジュリオ・アーミテッジだった。彼は近衛騎士団長の要職にありながら、上程府と無関係であるという珍しい男であった。議会メンバーの軍関係者では最も上役にあり、軍事面のリーダーになることは間違いない。

「宮廷の腐敗がなければ、ノーザンライト侯はリルガミンを守るために戦ったことでしょうっ！そして、ガゼ卿も死ぬことはなく、清廉な政治が保たれたはずっ！そうすれば反乱軍に対しても・・・」

「レント卿。この原因と結果を取り違えておいでだ。ガゼ卿の死はここにいる全員にとって痛ましいことではあったが、宮廷の腐敗があつて彼が死んだのではなく、彼が死んだから宮廷は腐敗し始めたのだ。ガゼ卿が健在であれば、バルコスキーの増長もなかった。だが、現にガゼ卿は志半ばにして亡くなった。我々はその志をつがねばならない」

アーミテツジは単純な武人などではない。エンジコートが彼を徴用したのは、極めて的確な状況分析と戦略立案の能力、そして何より理路整然とした言説が人を惹きつけることに気づいたからに他ならない。リルガミン王の元に彼を送つたのは、その言葉によつて、王を力づけ、人々の協力を得てバルコスキーらに対向させるためであつた。マッケンゼンで命を落としたものの、エンジコートの目論見は意外な形で実現しようとしている。

「レント卿、ガゼ卿は果たしてバルコスキーらに対抗するだけの存在であつたらうか？」

「……どういふことでしょうか？」

「ガゼ卿は私心を捨ててリルガミンのために戦つた。ノーザンライト侯もガゼ卿がそうした人物であつたればこそ、リルガミンのために剣を振るつたのではないか？上帝が失踪された時も、ニルダの杖が効力を失つた時も。ガゼ卿とノーザンライト侯がリルガミンから失われた今、高位の貴族達の中にはそうした人物がいない」

アーミテツジの言葉に熱がこもる。

「我々賢人議会はガゼ卿の志を継ぎ、私利私欲を捨ててリルガミンを守る存在でなければならぬっ！我々の当面の課題はバルコスキーを抑えこむことだけでなく、保身や私欲のために国政を壟断しようとする連中を駆逐することにあるのではないかっ！」

アーミテツジは朗々たる美声で言つてのけた。言葉の内容はもちろん、彼自身が固く信じる事なのであるが、そこには恣意的な演出も含まれている。だが、ほとんどの者はそれに気づかない。気づいたものも、特に嫌悪感を感じなかった。正論であるからだ。

「レント卿、他の方々もいかがじゃろうか？アーミテツジ卿の言い様は実に理路整然としており、また、納得のいくもの。我々の目指すべきところは、まず、志ある者が権力を握る体制を作り出すこと、それを目指そうではありませぬか。よろしいかな？」

レントも含め、全員が賛意を示した。

「もう少し話を具体的にする必要がありますね。失礼ながらこの席には高位の貴族とつながりの深い方もいらっしゃる・・・少し話していくことなのですが・・・」

申し訳なさそうな笑を浮かべてそう言ったのはボルタックである。彼自身は貴族などから最も遠い存在であった。エルフには高位の魔法使いであれば、宮廷の中枢に入った者もないわけではない。だが、ドワーフ族は膂力や戦闘力とはかくとして知性はあまり評価されていないため、騎士階級となる者はいても、伯爵以上の爵位や文官として出世した者は皆無であった。

「ああ、お気になさる必要はありません。たしかに私の父は十二諸侯に名を連ねておりますが、それほど孝行息子ではありませんからな。アーミテツジ卿程の理想を明確にいただいていたわけではありませんが、十二諸侯やバルコスキー伯爵の言いなりになるよりは、この賢人議会で働く方がよっぽど面白い。それで私には十分ですので・・・」

すぐさまそう答えたのはライノ・ウインザーズだった。ライノの推薦人は父親であるウインザーズ侯爵である。

「そうおっしゃっていただけるとありがたい。アーミテツジ卿のおっしゃる保身や私欲のために国政を壟断しようとする者が相争う体制、それをなしているのはバルコスキー伯爵だけではありません。彼と対立する者達も私利私欲で動いている」

「つまり、それは、我々を推薦しこの議會を創りだした十二諸侯のことですか？」

バン・ロイレが答える。バンは元々王立図書館の管理を任されている男で、深い学識を買われて推薦されてきている。

「はあ。申し上げにくいながら、我々のこの会議も、彼らに事あるごとに口を出されては、結局のところその使命を果たせないことになりましょう。バルコスキー伯爵への当て馬に使われるだけです。みなさんそれぞれに抱負はありでしょうが、リルガミンを再興を目指すというのなら・・・」

「十二諸侯に対抗しうる形を作らないといけないということですね。なるほど、ボルタック殿の意見は正鵠を射ている」

アーミテッジは深く頷いた。エンジコート軍にいた時よりも遙かに心地良い。彼とまともに議論ができる人物など、エンジコート将軍以外は幕僚の中にもいなかったのである。

「それについては、私に良い考えがございます。法を武器に彼らと戦うのです」

リーガル・ロダーの言葉に皆意表を突かれた。リーガル・ロダーは王宮の法務官で、今一人賢人議会に名を連ねるガイエス・ロダーの兄にあたる。文官であるリーガルに対しガイエスは城内の治安を守る護民兵隊の隊長を務める人物である。兄弟で法を作る人間と執行する人間がいるということだ。

「それは、ご兄弟のご専門かと思われませんが、どのような方法になりますかの？」

話を整理してすすめる役目は議長であるホワイトストーンが負っている。

「まず、我々自身を法律で定義し、自分自身を法律である程度縛るのです。もちろん、決してその法を破ってはいけない。我々の手で、この議会の存在を法の形で定義するのです。曖昧に置かれた機関を明確に定義するわけですな。我々を推薦した十二諸侯はそうした手続きに弱い。自分たちの都合よく考えていたところが、いつの間にか法によって書き換えられているとなれば、実際に何かが起こるまで気づきませぬ」

リーガルの話に今度はガイエスが続ける。

「次に、その法に則って、高位の貴族の権力を制限する。不当な行

為があれば、賢人議会の規約に則って、罰則も適用する。十二諸侯は我々を自分たちの郎党だと考えていると思われませんが、逆に言えば我々が独自に動き出せば何の力もないことになります」

「なるほど、十二諸侯にたいしてはそれでいいとして、バルコスキ伯爵とはどうなりますかな？」

アーミテッジはすでにロダー兄弟の考えを受け入れていた。法律の専門家たる二人にしか思い浮かばない発想であろう。

「曖昧な法ではありませんが、彼は宰相という役職に正式に付いている。これには法律で戦うことは難しいと存じます」

「なるほど、しかし、バルコスキーは人心失っている。側近たちの間からも離反者ができていくわけで。そうなれば、こっちは力技で崩すことも出来なくはないでしょうな」

皮肉たっぷりに言っただけなのは、そのバルコスキーの側近から離反した張本人であるライノであった。他のメンバー深く頷いた。なるほど、父親の言うとおり、バルコスキーに対する忠誠心などかけらも感じられない。

「どうやら、とりあえずの結論が出てきたようじゃの。まず、我々の存在意義と自らを縛る規則を定義する法を作ること。これはロダー家のご兄弟を中心に進めていただく。それから、バルコスキー伯爵に対応しては、彼から人心が離れていつていことを踏まえて、失脚させる方策を考える。ここはレント卿やウィンザーズ卿のお力を借りねばなりませんまい」

「並行して、やはり、軍事面のことも考える必要があるでしょう。身内にはかり気を取られて、その隙に攻めこまれては目も当てられない」

「そこはやはり、アーミテッジ卿、他の武官の方々と共に当面の方策を纏めていただけますかな？」

「いいでしょう。武官の諸君もそれでよろしいか？」

「結構です」

アーミテッジの言葉に、他五名の軍人たちが頷いた。

賢人議会のメンバーは十二諸侯が一人一名ずつを指名したが、ここには明確な方針があり、相互に調整を行って決めたものだった。まず、第一に軍事に関係者で実戦力の指揮が取れる者を半数入れるようにした。これは、今後の戦乱に対応するためと、バルコスキの妨害が最終手段として軍事力を用いるものとなったときに、直接的な方法で対抗するためである。

次に、リルガミンの政治の中枢には無関係だが、城塞都市の中で影響力のある者をメンバーで含めている。リルガミンの長老であるホワイトストーンや、ハインツ・ボルタックがこれに当たる。また、リルガミンで生活する人間以外の種族で代表的なエルフとドワーフからもそれぞれ代表をメンバーに加えている。ハインツ・ボルタックはリルガミン一の有力商人であるのみならず、城塞都市のドワーフコミュニティの代表でもある。また、タッグ・ウォリスはトレボ―上帝軍でワードナ配下にもいた事のあるエルフの魔術師で、リルガミン在住のエルフたちを代表する存在であった。

ホビットやノームと言った、城砦都市内では目立たない種族については代表者を含めることは出来ていないが、いずれは検討する必要があるとの認識で一致している。

また、メンバーには魔法使いが多く含まれる。長老ホワイトストーンは元々高名な魔術師である。ブライアント・イーノはロード、ライノ・ウインザーズはサムライであり、戦士であると同時に優れた魔術師であるとも言える。ラザール・ボレロは推薦者であるレンドルフ侯爵の先代が創り上げた銀狼騎士団の唯一の生き残りの僧侶である。ただし、当日は訓練中の事故で負傷療養していたため、試練場攻略には参加していない。参加していれば、生きて帰ってはこれなかっただろう。そして、元宮廷魔術師であるタッグ・ウォリスである。

これは、軍事面でも今後は魔法戦術が一般化することを考えてのものでもある。魔力自体は別にして、魔法について詳しい人間をで

きるだけ集める必要があつたのだつた。

賢人議会のメンバーは次々と新しい方策打ち出していった。それは、ニルダの杖とトレポーを失い、衰退し続けるかに見えた国家に再び火を灯していった。だが、そのために、戦乱の時代は二十年の長きに渡つたとも言えるのである。

バルコスキーや十二諸侯が主導していれば、数年内にはラスティア軍に滅ぼされていたことだろう。

## ラストティア拳兵

ラストティア、スロウ・アンド・エフリス農園には多くの兵士たちが集まっていた。ケインがラストティアに戻った時には、すでに拳兵の話が伝わっていたのである。その受入れの事務を担っているのは、エフリスと農園の使用人たちである。僅か数日で七千の軍勢が出来るがりつつある。

ラストティアにはマツケンゼンやバンセンノルムのように大規模な部隊が駐屯しているわけでもなく、コーウエルのように総督がいるわけでもない。ケインがラストティア侯爵に叙任されるまでは、まったくの無政府状態の地域だったのである。ごく一部、リルガミンよりの地域には十二諸侯に割譲された土地もあるが、ごく僅かであった。

「おうっ！帰ったか。戦争が好きってわけじゃないが、毎日ふさぎこんでいるお前さんを見ているくらいなら、こっちの方が遙かにましだな」

母屋に帰ってきたケインを見てエフリスは開口一番こう言った。すでに、ケインの逡巡とは関係なくラストティアは独立へ向けて動き出しているのである。

「全部、ニトロの手引きか？」

「ああ、今はローキーと名乗っているらしいがな。使いの男が死の指輪の刻印が付いた手紙を持ってきてな」

試練場時代、ケインとニトロが持ち込んだ死の指輪を買い取ったのは、当時のボルタック、エフリスである。まだ新顔だが貴重な東方様式の剣を携えたケインと、リルガミンでも有名な盗賊ニトロ・キッドの二人が血相をかいて持ち込んだ指輪のことは彼もよく覚えていた。

「で、とりあえず、兵士は集まってきている。まあ、兵糧の備蓄はたっぷりあるから、いくら来ても心配ない。で、当面はどうする？」

「俺のいないところで話が進みすぎていて困るな・・・とりあえず、状況を整理したい。シルヴィ達の事情もよく聞かないといけないしな」

リルガミン王の前に出たときに従ったシルヴィとルウは、ウィルス・サイトが連れてきたのであるが、計画の説明を受けてすぐに王宮に乗り込んだために、ほとんど話す時間もなかったのである。

「ああ、それから・・・そのウィルスって奴が、夕方に首領をお連れするって言ってたぜ。お前さんを嵌めた張本人だからな。言いたいことがあるなら言ってやればいい。だが、もう後戻りはできんぞ」  
「わかってる。夕食後に打ち合わせしよう」

そう答えて、ケインは自室に入ってしまった。

寝室に戻ったケインはすぐに着替えを済ませたあと、ベッドの下から大きな箱を取り出した。箱には埃が積もっており、しばらく動かしたことがないものであることがわかる。

埃がまわらないように丁寧にベッドの外に引き出し、フタを開ける。そこには、大きな紋章の入ったメダルと一着のチェインメイルが入っていた。メダルにはラストティア騎士団の紋章が入っている。チェインメイルは古代魔法による防御が施されたもので、死の指輪アイマイ・オフ・フレイオンを運んでボルタックに売った際に手に入れた、氷の鎖帷子である。

「あの頃は若かった。あの頃に戻れというのか・・・逡巡も悩みもなく、ただ必死に戦っていたあの頃に・・・」

「さあ、さあ、皆さん！難しい話は後にして、まずは、腹ごしらえをしてくださいなっ！」

そう言って、ライラはメリーとティムに手伝わせ、食事を配り始めた。

テーブルにはケインやエフリス、使用人たちに加えて、六人の客がいた。シルヴィ・プリス、ルウ、ルサス、アレキサンダーのエルフの里から来た四人に加え、彼らを案内してきたウィルス・サイト、

そして・・・

「ふむ。これがあるからここは最高だ。ライラの料理が食べるとなれば、どんな苦労も厭われないってな」

機嫌よく言ったのはニトロ・キッドである。

「ローキー、棟梁はもう少し上品に構えていただきたいのですが・・・」

「上品な盗賊なんて気持ち悪いだけだろう？」

ウィルス・サイトは困った顔をしている。

「ま、まずは食事を済ませましょう。難しい話もニトロへの苦情も、食べながらするには消化に良くないわ」

シルヴィの提案に全員賛同した。

「さて、ケイン、無理やりの形になったのは謝る」

ニトロ・キッドは頭を下げた。食堂とは別室、客人が来たときの打ち合わせなどを行うための部屋で、ここだけは、農園主スロウというよりは、ラストティア侯爵ケイン・ノーザンライトが仕事をする場所だった。全員、手元にはワインや強い酒の入ったグラスを手に入れている。

「いや、そのことはいい」

「それから、ベルグのことも・・・」

「あれは俺の責任だ。俺がもっとしっかりしていれば死なせることはなかった・・・」

ケインはニトロを責めはしなかった。ニトロとしては殴られる覚悟でラストティアまで出てきたのだが、ケインにはその気はないのである。すでに、彼は自分を取り戻していた。ガゼが死ぬ前の自分ではない。試練場に挑み、ひたすら迷宮の最下層を目指していた頃の自分をである。

「さて、今はこうして兵士も集まってきているからな。これからのことを考えよう。まず、盗賊組合とエルフの隠れ里が俺に協力してくれる理由を教えてください。まずは・・・ああ、ウィルス君だったな。」

二トロが協力してくれるのは分かるが、その二トロを首領に仰いでまで俺につこうとした理由が知りたい」

ウィルス・サイトは立ち上がったて答えた。

「盗賊組合はダルパプスの反乱の際はリルガミン王家に付きましました。その理由は、すでにマルグダ王女とアラビク王子しか残っていません。たリルガミン王家に付いたほうが、実入りがいいと考えたからです。実際、結果として、莫大な報奨を頂きましたし、盗賊組合が非道を行わない限りにおいては我々を攻め滅ぼさない旨の誓約もなされたのです」

「リルガミン王家がそれを破ったと？黒鳥の森の縄張りを失ったのが理由か？」

試練場時代には黒鳥の森はゴスク達のような、無法者の盗賊、力押しの強盗まがいの連中が潜む場となっていた。また、名うての盗賊であった二トロも当時は組合とは無関係である。すでに盗賊組合の勢力は衰えていたのだ。

「いえ、実を言えばトレボー帝と我々の間にも密約があったのです。諸外国の状況を調査し報告する代わりに、占領地にまで盗賊組合の勢力を広げることが許すという確約がありました。黒鳥の森のアジトは、不要になったので放棄したに過ぎません」

「そうであればリルガミンを裏切る理由は・・・」

「問題はトレボー帝が失踪された後です。いや、我々は失踪する前からトレボー帝の変貌を知っておりました。もはや頼りない君主であることは目に見えていたのです。我々はそれに変わる人物に協力することを考えていたのです。もはやリルガミンの力で機知世界がまとまることはありませんでしょう。そうであるなら、一番安定した国を築けそうなところに力を貸したいと考えたわけです」

「それが、ラスティア、俺だと？」

「はい」

「理由は？」

「ケイン様はラスティアを独立させ、あるいはリルガミンには進軍

するかもしれませんが、それ以上は望まないでしょう？他の国の反乱勢力の首領には欲があります。トレボーの電撃戦を自分の国から逆に行いたいという……」

これは、アルフ・ヴァール・シャルンホルストがマッケンゼンで口にしたことのある話である。この反リルガミン戦争は独立戦争というだけではな終わらない。機知世界の覇権を掛けた戦いになるというのだ。

「ふうむ……単に独立するだけじゃなく、独立した他の国にも攻めこんで、トレボーに成り代わりたい奴がいるということか……と言っても、ガーランドやコーウエルは反乱に成功してすらいない……」

「まあ、言ってしまったえば、マッケンゼンのアルフ・ヴァール・シャルンホルスト卿とバンセンノルムのウエーバー卿のことなんですけどね」

「!？」

ニトロとウィルス以外の全員が意外な顔をした。

「アルフ・ヴァール・シャルンホルスト卿は先日亡くなったはずでは？」

マッケンゼンを独立に導いた天才軍略家の死はすでに機知世界中に広まっている。

「まあ、一度死んだからって、蘇らないとは限らないじゃないか？」

「……カドルド？しかし、生き返ったのなら……」

「それを隠してなにかしようつてのがあの御仁の可愛くないところだね」

途中からはニトロが答えた。

「なるほど……まあ、シャルンホルスト卿の事はあとから考えよう。とりあえず、盗賊組合が協力してくれる理由はわかった。見返りは、組合の存続と、報酬、それからリルガミン以外とはむやみに戦争しないこと……それでいいんだな？」

「けっこうでございます。今日は首領がどうしても言うので、直

接こちらに来ておりますが、今後は私が組合とケイン様の繋ぎ役となりますので、なんなりと仰ってください」

「ああ、よろしく頼む」

ケインはウィルスと固い握手を交わした。エルフ族の年齢は人間のそれとは違うが、ウィルス・サイトはルウヤルサスと同年代と思われた。若いがそうしたような修羅場を潜ってきている。二ト口も彼のことを気に入っているようだから、先日のマロール意外にもそうしたような腕利きのだろう。

「次は、シルヴィ、エルフ族が俺に協力してくれる理由だが・・・」

「ええ。ま、と言ってもまだ私一人の考えで、長老たちは様子見というところなんだけど・・・そっちのウィルス君が私のところに話を持ってきたの。今回の戦争ではトレボアの電撃戦以上に魔法戦術が用いられる。そうなれば・・・多数の魔術師がいるエルフに目をつけられない君主はいないはずだっつね」

「ラスティアに来なくても、どのみちどこかの国からスカウトが来るってことか・・・で、なぜ俺に？」

シルヴィは手元のワインを一気にあおって、ため息を付いた。それから一気に話し始める。

「スカウトに来るぐらいだったらまだいいんだけどね。攻めこんできて無理やりって感じにやられたらたまつともものじゃないわ。実際・・・トレボアの電撃戦の時は、他の隠れ里ではなかった話じゃないのよ。トレボアはワードナを中心とした魔法騎士団があつたからそれ以上は望まなかったけど、他の国がエルフに目をつけて味方に引き入れないように・・・コーウエルでは実際にエルフが虐殺されているわ。人間の歴史には書かれていない事実ね・・・」

「そうか・・・俺はシルヴィヤルウには世話になつている。アレキサンダーの面倒も見てもらったり、エルフの隠れ里には恩があると思つているよ。だから、いやなら戦に協力してくれとはいわない。だが、隠れ里が危険なら、いつでも全員引き連れてラスティアにや

「つてきてくれ」

シルヴィが一瞬泣き笑いの表情を浮かべた。ニトロやウイルスも微笑を浮かべる。

「ケインならそう言うと思ってたわ……。でも、そうはいかない。私だって、どうせ戦争になるなら、まっとうな人間に勝ってほしいわ。ラストティアが滅ぼされたら、保護してもらってもエルフに未来はない。少なくとも私は、あなたに協力する」

「先生、自分だけみたいにいわないでください。私だって……」  
「私もわざわざ出てきたんですから」

ルウとルサスは抗議の声を上げた。二人の頭を撫でながら、シルヴィは言った。

「長老たちの間には、ケインのことも信用していない……。というより人間を信用できないというエルフもいるわ。でも、いずれはケインのことを分かってもらえると思う。だから、私は全力であなたの力になります」

「……シルヴィ……。ありがとう」

「それに、ニトロにばかりかっこつけさせてられないわ」

「おいおい……」

その場にいる全員が大笑いした。ニトロとシルヴィは僅かな期間だが一緒に暮らしていたことがある。関係修復とはなかなかいかないのだろうが、過去のことにはもうこだわりはないようだった。

「ところで……」

ケインは思い出したと言うように、話を切り替えた。もう一人、意志を確認すべき人物がいた。

「アレックス。君はどうする？ 必要ならグリスクに帰れるように手配することもできるが……」

「私は今はシルヴィ先生の内弟子です。勝手に帰ったら母の折檻が待っていることでしょう……」

「つて・・・と言つても、状況が状況だ・・・」

「とりあえず、事情を説明しておいた方がいいわね。手紙でも書いたら？」

「グリスクは遠いですが、必要なら盗賊組合で配達を請負いませう」

「では、そうさせていただきます」

盗賊組合もアレックスの両親が村人全員と共にラスティアに向かっていることまでは知り得ていなかった。

翌朝はラスティアではすでに最大のイベントとなっているスロウ・アンド・エフリス農園の収穫祭であった。と言つても、今年は例年とは全く様子が違う。多くの人々でこつた返すのは同じであるが、その大半は義勇兵であり武装している。それ以外の者もある種の期待を持って農園を訪れていた。

祭りの挨拶はケイン自らが行うのが習わしである。それは、ラスティア侯爵となつてからも変わらぬ慣例であつたが、侯爵を辞退した後も変わらなかつた。だが、今年はその内容はまったく別ものであつた。

「みんな聞いていることと思う。今日は収穫祭だが大事なことなのでこの場を借りて離しておきたいことがあるんだ」

口調は例年と全くかわりない。多くの人々を前にしても、ケインは偉ぶることは一切無い。周囲を見回しながら、大きな声ではあるものの、親しみを込めて話しかける体であつた。

「俺は爵位と称号を返上すると同時に、ノーザンライトの姓を捨てたっ！本当の名前をこの場を借りて発表したい。俺の本当の名は・・・」

ここまでは噂としても皆知つてはないなかつた。リルガミンでも箝口令を敷いたのだ。商人などリルガミンの事情に詳しい者以外は

ここまでことは知らなかった。

「ケイン・セイバーフロストっ！父親はアーウィン・セイバーフロストと名乗っていた。俺は父親の志を継ぎ、ラスティアを守るために戦うっ！」

会場中が異常な熱気に包まれた。

「すでに西方二カ国は独立を果たした！リルガミンはいずれその討伐のための軍隊を発することだろう。ラスティアはその通り道になるっ！我々も抵抗しなければ、田畑も家も牧草地も軍隊に踏み荒らされる！俺達の手でこのラスティアを守るうっ！」

「ケインッ！ケインッ！ケインッ！」

会場中からケインを称える声があげられた。この瞬間、ケインはラスティアの独立革命軍の総帥となったのであった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8386o/>

---

続 リルガミン戦記 群雄編

2010年12月15日15時55分発行